

華嚴經の天秩の第一冊即ち初卷の五十九枚目の表にあります、兎も角之は賢首菩薩が文珠菩薩に向つて説かれた言であります併し佛自ら申された言でないと思はれませうが佛自らの言でなくとも佛の意に叶つた事を言へば同じ事になつて來るのであります。

賢首菩薩此菩薩と云ふことは略語であつて具さには菩提薩埵と云ふのであります、之は天竺の原音ではホードヒサツトヴを寫したのであります、覺有情と譯する……情は心です覺わたいと云ふ心がある者は即ち菩薩であります、皆さんが私の御話するのを聽いて覺わたいと云ふ御方があります、かありませぬか知りませぬが如何なる事を南條文雄が言ふか、兎も角聞いてやれと云ふ御親切がありますから御集り下すつたのであります、私には皆さん方に菩薩と云ふ號を上げたい併し御受け下さらねばそれで宜いので私は持ち歸るだけであり、中には悪口を云はうと云ふ菩薩もありませんが、何であらうと聞いて遣らうと云ふ御心がなければ御集り下さる譯はないので、澤山なる菩薩の御方に逢つて御話をするのであります。

文珠菩薩は委しく云へばマンチユシユリーと云ふ天竺の音を寫したのであります、マンチユは妙シユリーは吉祥とも徳とも譯して、妙吉祥又は妙徳とも云ふ菩薩である。

扱て直ちに信の解釋に移りますが、三人寄れば文珠の智慧と云ふ程で、釋迦如來の左右を離れなかつたのが文珠菩薩と普賢菩薩とであります、然るに賢首菩薩を文珠菩薩が試みたのか知れませぬが信と云ふものは人の心の中になければならぬと云はれて居るが、何程だけの價値かと問ふたら、賢首菩薩が解釋せられた、それを佛が聽いて居られました、佛の心と同じ事であつたから佛經の言葉となつて居るのであります。其答は二十四句あります、之を讀んで仕舞へば何の事もありませぬが、それで御分りになれば宜いが、少しばかり私の氣附いた事を申添へて見やうと思ふのであります。

先づ初めの二句は、信は道の源、功德の母たり、一切の諸の善法を長養す、ありて、信は道の源泉なり、功德を長養することは母が吾子をそだてるが如しと云ふのである、之で二句の中に信と云ふものと二つの解釋があります。

何事にも信用がなくてはいかぬと云ふことは皆さん御承知でありませう、皆さんに信あつてこそ、いよ／＼御國の御威徳が此海外までも現はれるのである。私共初めて當地方に參つて、御國の勢の隆盛なることを實見して、東京に歸れば心強く國に居る人にも話が出来ると大に喜んで居る。何も皆さんを煽てるのではありませぬ、有難く思ふ餘り申すのであります。信と云ふものゝ第一の解釋は支那の人の信の説明に因りますると、論語とか孟子とか大學とか中庸の中にも信と云ふ事が幾等もあります。信は人の言の實なるなり、人たる者の言に實があるのである。無い事を有るが如く言ふのは實が無いのです。確な事を云ふ人が虚言を吐くから己も吐くではいけません。虚言と云ふことは善くない事と氣が附いたら、世界の人が皆言つても己は言はぬと云ふ決心がなければいけません。其様な窮屈なことでは生きて居る甲斐がないからと云ふから自暴自棄となるのである。何であらうと聽いて遣れど菩薩心で來て御座るからと思つて、私は後で何と云はれても構はぬから言ふのが役目でありませう。申します、皆さんは聽役であるから恐

縮ではあります。終りまで聽いて下さるやうに願ひたい。敵に背後を見せるは卑怯だ。私は敵ではありませぬが、笑聲起る。虚言伴偽のないのが信である。心に思はぬ事を言つては虚偽であります。虚偽なら言はぬ方が宜いと云ふのが私共の心得であります。

信と云ひ誠と云ふ兩方を申上げたが、それでは時間を長く取りますから割愛してこれだけ申しますが、日本のまことと云ふ言葉之は大切なものであります。片假名でも平假名でもまこと……マコトの三字であります。之を支那の人の持前の四角の文字で顯はさうと云ふ時には、四聲解環と云ふ本のマコトの下を御覽なさい。二十五字出て居ります。之を私が東京上野の横に在る岩倉鐵道學校で一時間以上かゝつて御話をしたことがある。信なり誠なりマコトが大切であります。兎も角軍人の御方が御見ねになつて居りますから、やはり少々御話をします。私が明治二十一年頃名古屋に居りました。其頃の第三師團の御方に毎月精神修養の御話をしました。即ち明治十五年一月四日附を以て軍隊に

御下しになりました。先帝陛下の御詔勅にも、軍人は忠節と禮義と武勇と信義と質素の五箇條を守れと仰せられて、五箇條の精神は一の誠心である。心だに誠なれば何事もなるものぞかし、と示させられてある。心だに誠の道に適ひなば祈らずとも神や守らん、心に誠があれば何事も出来る、と仰せられてあります。まことは誠心であります。私共の宗派、真宗の眞もまこと、まことには二十五字ある、御諒察の諒もまことであり、それであり、まことから、信と云ふものは道の源ぢや、眼に見ぬ精神の踏み行く道の源である、水の流に譬へて見れば、此方にも松花江と云ふ大きな川があります。其源があればこそ海まで注ぐのである。吾人人間がかうして生活して行く道を水に譬へますれば、源は信であります。信は何時までも變らぬ何處までも變らぬと云ふ心で、それで以つてやつて行けば行く處として可ならざるはなし、千萬人の中に行つても愧づかしいことはない、之で第一の解釋は御分りになつたとして措きませう。

先帝陛下より明治二十三年十月三十日附を以て下し賜ひたる教育に關す

る御勅語にも、君に對しては忠親に對しては孝、兄弟に友に夫婦相和し、朋友相信じと御遣ひ別けになつてあります。が、朋友に限つて信と云ふ御言葉ではないと思ひます。誰に向つても誠心の源を守つて行かなければならぬ、府縣には元標と云ふものがある、何處々々へは何里何町何尺と記してある、之が源があるから末が分るのであつて、道の源である、それは當然だと云へばそれまでですが、其當然が守つて行けなければ當然以外の事は尙更守つて行かれぬと思ふ、それなら一足飛びに二階に飛び上がるのと同じ事、危険な事です。第一の解釋は道の源で、第二の解釋は功德の母親であります。何の方面に向つても功をなすに第一番無くてならぬものは誠心であります。徳は得なりで我が有となつたのが徳であります。誰にも買ひ取られない奪ひ取られないのが徳である、金錢や威力で買ひ取られ奪ひ取られる様であれば徳でない、信と云ふものが功をさせるから之を徳とする、之で第二の説明が済んだ。

第三第四は一句になつて居る「疑網を斷除し愛流を出づる」疑ふは信すると

は反對である、半信半疑と云ふことがありますが、信と云ふものは明りです、疑は黒暗であります、専門の言葉で申しますと、明來暗去で明くなると暗は去る、信は疑の網を断除するのである、皆さんは疑深い御心はありますまいが、分らぬ事は分つた人に尋ねれば宜い、それを世間では尋ねるのが嫌だと云つて苦んで居る、彼様な人に聞くのは愧かしいとか云つて、知らぬ事を知つた風をして困るのは詰らぬ事でありまして、尙且つ損をします、それに就て想ひ起した事があります、私が先年只一人で印度に参りました時に、印度の言葉を充分聞けば宜かつたに、英語でやつたら印度の言葉をさう覺わななくても宜いと思つたのが、抑も私の心得違であつた、パンガローと云ふ言葉を聞いて居つたが、それを忘れてホテルで分ると思つて馬車に乗つた、さあ大變です、ホテルと言つても一向通じない、彼方此方と廻つて居る中に日は將に暮れんとして、氣が氣でない、すると漸く一軒の西洋家屋を見附けたから、大きな聲で叫んだ、すると英國人と見ね、大分年老つた人が出て來た、それで私は實は印度の言葉を忘れてホテルと言つたが分らぬ、何と言つたもの

でせうと尋ねた、すると其人がそれは大變損をした、餘程馬車賃を拂はなければならぬ、乃公が居つたから宜かつたが、此地には他國の人は乃公一人だと云はれて、ほつと一息吐きまして、其人に教へて貰つてやつと分りました、が、人に聞くのが嫌ぢやと云つて尋ねなかつたならば、大變な事になる、それでありますから、分らぬ事を分つた風をするのは、大變間違つた事である、明來暗去であります。

次に愛流を出づるで博愛之を仁と云ふと、韓退之も言つて居るが、成程愛は結構である、其上に信を盡くせば、猶ほ結構だ、愛は慈愛の愛です、親が子を愛する如くに、神佛も人を愛する、愛は結構だが、愛著即ち執著となつてはいかぬ、寢ても寤ても忘れぬ、迷惑千萬ですな、信と云ふ誠の心があれば、さう云ふ事にはならぬ、世の中には随分何の因果で縁もゆかりもない人を助けなければならぬか、と云ふやうな人があると聞きますが、私共はさう云ふやうな心を持つべきものでない、と説き聞かされて居るのであります、他人の世話に預からぬ而已ならず、他人の御世話が少しでも出來ると云ふ方に廻はし

て貫へば是程仕合なことはない愛著の流を出るのでありますさうすると眞箇に立派な愛が出て来ると云ふことが味はれる。

第五には「涅槃無上道を開示す涅槃と云ふことはニルヴァナ不生不滅とも滅度とも譯します生死以外の事である人間の生命が有らうが無からうが精神は不滅と云ふ事であります楠公の御話をして見ても分る楠公の忠義は何處までも變らぬ今日何百年経つて居つても變らぬ所謂千古不滅である。私が英國に居つた時に英文の稽古の爲め我國に楠公と云ふ忠臣があらつたと云ふ事を綴りまして先生に見て貰つた所がそれで西洋の學者先生が誠の精神は何時までも變らぬと云ふ事であります。

第六信は垢濁なし心清淨なり若し垢や濁りがあればそれは眞箇の信でない垢や濁がないから清淨潔白である。

第七「僑慢を滅除し恭敬の本なり」頭ばかり低げて居れば敬禮が濟んだと云ふのは間違であるそれは眞の敬禮ではない心から敬はなければならぬ心

の中に僑慢が無くならぬと心から敬禮することが出来ぬ信は僑慢を滅除するから恭敬の本となるのである。

第八「亦法藏第一の財たり」信は萬事の本たりといふ古語も能く頼などに書いてあるのを見ます。それです法の藏吾人の心の手本と爲すべき所の物を寄せ集めた藏の中の第一等の財は信であると云ふことであります。

第九「清淨の手となりてもろくの行を受く手が汚れて居ると恥かしくて手を出して物を受け取る事が出来ぬ信心があれば清淨の手となつて快く受けられる如何なる處に行つても恐るゝ所はありませぬ。又之に就て憶ひ出しました事を申します私が明治二十九年二月二十四日東京から高崎の兵營に参りましたそれは二十八年太平山の戦役の名譽の戦死者の一周年祭でありまして伏見宮殿下も第一旅團長であらせられました御出張になつて居られました其招魂祭の時に過日大連まで隨行して参りました大谷派本願寺の連枝に隨行して参りました連枝の御話が濟みまして其後に私が出て随分長く御話をした勿論宮殿下も連枝も休息所に入らせられ

たと思つて言へるだけ言つた武の七徳と云ふ事を御話をした濟んで後方を顧ると宮殿下が立つて御出でになりました、長くやつたなあと仰しやつたそれで私は宮殿下が此處に居らせられたと知つたなら、斯う長く御話をしませなかつたのでありますと申したら、いや宜かつたと仰しやつたので、私は非常に有難く思ひました、それから後廣島に参りました時に宮殿下に御伺ひしまして、高崎で拜謁致しました時、長く御話を申しまして恐れ入りましたと申し上げましたら、あゝさう云ふ事があつた、言へる時に言つた方が宜いと仰せになりましたが、私は心に間違がないと信じて疑はざる所を申したのであります、御取上にならぬならばそれは私の不徳の致す所で、退いて徳を養ふより外はありません。

第十「信は能く惠施して心に吝なし」信と云ふものが心にありますと、能く惠み施すから心に吝む思ひはない、持つて居ないものは施すことは出来ませぬが、持つて居つても心に信と云ふものがないと、惠み施さない、即ち吝むなるのであります。

第十一「信は能く歡喜して佛法に入る」天竺の言葉に「ブラサーダ」と云ふことがあります、ブラは進む、サーダは英語のシットであります、進んで座わる、幼兒が御母さんを見附けると、ニコ／＼として進んで行つて、其側に座わる、其時の幼兒は母を心底から信用する、此御方が育て下された、母親の親切と云ふものが子供の心に貫徹するから、さうなつて來るのであります、其意味を今信は能く歡喜して佛法に入ると云ふのであります。

第十二「信は能く智と功德とを増長する」。

第十三「信は必ず如來地に到る」神様とか佛様と云はれるのは信が源であります、信があれば間違なく如來として拜まれる位置に到ると云ふのであります、心の中に信する所がなければ、是程危険な事はない、と私共は堅く信するるのであります。

第十四「信は諸根をして淨明利ならしむ」之に就ても想ひ出す事があります、それは終に言ひますから本文だけ申して置ませう。

第十五「信力は堅固にして能く壞ることなし」旅順の水交社で御話をして來

ましたから、速記せられて一冊の書籍となつて出ました後御覽になると分りますから、詳かに御話をしませぬが吾に待つあるを待むと云ふ事に就て御話をしたのであります。私は慶應二年十二月から慶應三年九月一年と四年の正月迄、一年二箇月鐵砲を擔いで居りまして、晝の間は戦争の稽古をデンデコデンの太鼓に合せて歩調を取りて致し、夜間は兵書を読みました。此僧兵隊となつて居つたことが身の爲めとなり、今日まで生きて居ると思ひます。二十五の年にもはや五箇年間しか活きられぬと或人から言はれましたが、今日六十五歳まで生きて居ります。それは兎も角、孫子の謂つた吾に待つあるを待む之が如何にも宗教の御話にも用ゐる事が出来る、兵を用ゆるの法は、其來らざるを待むなけれ敵が攻寄せて来ないと云ふことを待むことになると油断が出来る、油断は大敵である、無常の風は絶えず吹いて居る、それを何時でも來れば來れど心にチャンと待む所がなければいかぬ、吾に待つあるを待む、それが信の力であり、此道さへ進んで行けば、身體は倒れても心は倒れませぬ、其御決心があつてこそ、皆さんは心丈夫に御働きに

なることが出来る、と信じて居ります。魏の曹操は月明かに星稀に烏鵲南に飛ぶと云ふ詩を吟じて戦つた、其人が孫子の註を書いたが此文は唯八字であります、安きに危きを忘れず常に備を設くるなりとある、此處にちやんと常備と云ふ字が出て居る、孫子は尙重ねて其攻めざるを待むなけれ、吾れに攻むべからざる所あるを待むと申してをる、さうなると一寸一分の間隙もない、攻め込むべき餘地がない、それが信の力である。それで信力は堅固にして能く壊ることなし、打ち壊はされるやうでは信ではありませぬ。彼の人は信用がありませぬと他人が云ふ、おとさうかと信用が出来なかつたら眞箇の信用ではありませぬ、眞箇の信用となると他人が百萬讒言を構へやうが乃公は信せぬと云ふことになる。

第十六信は能く永く煩腦の本を滅す、煩腦と云ふことは滅多に皆さんは御遣ひになりますまいが心の病氣である、クレイシヤ Klesha 心を腦ます、それが煩腦であります、其本を無くするのである。

第十七信は能く専ら佛の功德に向ふ、劣つた人を遠ざけて優れた人に近附

くと云ふのであります。
 第十八「信は境界に於て著する所なし」物事に悪る固まりをせぬのである。
 第十九「信は諸難を遠離して難なきを得る」精神一到何事か成らざらんと朱子は言つて居る、支那の人も日本の人も感心して居る言ですが、我が推古天皇の時代に、聖德太子は、天皇が叔母様に當る女帝であつたから、攝政當今で云ふ總理大臣以上の位に即いて居らせられた時に十七憲法が出来た、其中にも何事か成らざらんと云ふ句を二度まで用ゐられました。其第九條に「信は是れ義の本、事毎に信あれ信あらば何事か成らざらん」其善惡成敗要は信に在り、君臣俱に信あらば何事か成らざらん、君臣信なくんば萬事悉く敗るゝとあります、實に活潑なる所の力が現はれて居りました、吾々さう云ふ言葉に感服して居るのであります、御身分が上であつても信が有ると無いとに依つて成敗に關係するのであつて、信あれば困難な事も安樂に出来るのである、信を離れては到底困難に打ち克つことは出来ぬ、之で十九まで済みました。

第二十「信は能くもろくの魔の路を超出す」魔は障礙の義で、之を飛び越すが信である。

第二十一「無上解脱の道を示現す」我が信じて居る事は如何なる人の前にても申上げるに毫も恐るゝ所がない宮様が御居になつては此様な事を云つてはいかぬと云ふと、相濟まぬことであり、何誰の前でも申して差支ないと信じて居りますから申しました、横著な奴と思はれませうが、私さうは思ひませぬ、それだけの事です。
 第二十二「信は功德不壞の種たり」此種は腐らない壞れない所の種である。
 第二十三「信は能く菩提樹を生長す」菩提と云ふ樹を生長させる植物は土があつても固くて水氣がなければ枯れると云ふことがある、植物は梵語ではパダパと申します、動物は口で飲むが植物は足から飲んで生きて居ると、三千年の昔の人が思つた、根を以て水を吸ひ上げて生命を繼いで居る、菩提は覺とも道とも譯する心に踏んで行く道を生み出す一本の樹に譬へて見れば、其根を成長させる心の悟りの基となる、と云ふのであります。

第二十四「信は能く最勝智を増益す」。

第二十五「信は能く一切佛を現す」信と云ふものが能く一切の佛を現はす、信のない人には神様も佛様も現はれぬと云ふことになられます、之で濟みま

した。
能くこれだけの時間を御付き合ひ下さいました厚く御禮を言はなければならぬ、何うか御互に人間心の踏んで行く道を踏み違へぬやうに致したいと云ふ心から私の感じました事を申し上げたので、時間ばかりを取りまして甚だ御迷惑でありましたらうが私の申しました中の一言半句でも精神修養の御参考になる事がありましたならば、大變幸福と思ふのであります、今晩は之で御別れすることに致しませう。

世を益することなくして誠實に努めたりといふものなし。

(ラスキン)

擇其善者

(十一月十四日大石橋に於て)

私共専門の書物の講義を聴く前に、論語孟子と云ふやうな書物の講義を聞きました、其論語の中で孔子の言があります、子曰く、三人行へば必らず吾師あり、其の善なるものを擇んで之に従ふ、其の不善なるものにして之を改む、と斯う言つてあります。三人行へばと云ふのは、三人連れ立つて道路を歩むとすれば、分り易い、自分の右にも一人、左にも一人居る、さうすると、其の中に師匠とすべき御方があると云ふやうに云はれたやうであります、有の儘に云へば行ひです、行と云ふことは實行することであり、矢張り道路を歩くのも働きのありますから、同じ歩行の行の字を用ゐる、三人列んで参ります、私の右を歩く人は姿勢正しく歩いて居る、左を歩く人は姿勢が少し正しくないとなつたら如何でせう、右の人のやうに行儀正しく歩いて行く人は善なる者である、さう云ふ人を擇ぶ、其の人の歩き方に従つて行く之が

正しく教へて呉れる人でありませぬ、若し左の人に見做ふて行く、それが爲めに何う云ふ間違ひが起るか知れぬ、同じ道路を歩くなら曲んで歩かずに真直に歩けば宜い、それで其の善なる者を選ぶと云ふ事は何にでも當て嵌めて言へますけれども、今晚は朋友を選ぶと云ふことに就て暫く御話して見やうと思つて此本を持つて出ましたのであります、實は先月の二十五日大連の本社の讀書會の方で、五十六箇條だけの御話を致しました、それは何れ私が今度御話をすつかり致したつてから一冊の本になると承つて居りますから、其の本を御讀み下されば御承知が出来ますが、讀書會の講話の節友を選ぶと云ふことは、今日は御話を致しませぬと申して置きました、それを今晚此處で御話を致したいと思ふのであります。

此本は六方禮經四譯對照と申して今年の八月一日から五日まで内地の福岡に在る九州帝國大學の佛教青年會の夏期講習會に於て御話を致しましたのであります、此本の初めに友を選ぶと云ふことが注意してある、何う云ふ人が何う云ふ場合に注意されたかと云へば之も詳しく言つて居る暇が

ないが三千年の昔印度に在つた事でありませぬ、丁度三千年の昔に釋迦如來が天竺の王舍城と云ふ都を離れた處の山の中に居られて、朝早く都を指して出掛ける途中で遙か先方を見ると、一人の立派な若者が身體を清めて東西南北上下の六方に向つて禮をして居る、それが釋迦如來の眼に止まつたから、すつと其前に行かれて、何の爲めに六方に向つて禮をするかと問はれた、其の若者は尸迦羅と云ふ者で、天竺の長者の檀那であります、長者と云ふのは印度の語ではシユレーシユトヒ又と云ふ語である、其の長者に向つて何の爲めに禮をするかと尋ねられた時に、其尸迦羅が正直であるから何の爲めか知りませぬが、親の申附でありますから、毎朝六方に向つて禮をするのであります、何う云ふ理由か聞く違がないうちに親は現世を去つたのであります、併し歿くなつたからとて吩咐を破る譯に參りませぬから、譯は知りませぬがやつて居りますと答へた、それが釋迦如來の心に適つたものと見なしまして、之は感心だ、親の吩咐だから譯が分らぬが行ふと云ふのでありますから、斯様な人に話をして置いたならば、此話が末長く残ると

云ふことに氣が附いたらしい、其處で其の心得を説き聞かされた。先づ東に向つて禮をする心得には子として親に對する心得が五箇條親として子に對する心得が五箇條南に向つての心得には弟子が師匠に對する心得が五箇條師匠が弟子に對する心得が五箇條西に向つては妻が夫に對する心得が五箇條夫が妻に對する心得が五箇條北に向つては親族朋友に對する心得が五箇條地向つては主人が召使の者に對する心得が五箇條召使の者が主人に對する心得が五箇條天に向つては人が沙門道士に對する心得が五箇條沙門道士が人に對する心得が六箇條之で五十六箇條になつて居ります。

其前に先づ第一に友を擇ぶと云ふことが叮嚀に訓へてあります、之は私共子供の時から聞いて居る水は方圓の器に従ひ人は善惡の友に依る朱に交れば赤くなる、と云ふ諺もありますから皆さんも御朋友を御擇びになつて居ると思ひます、三千年の昔釋迦如來が尸迦羅なる者に向つて友を擇ぶの法を説かれた、其の前に一段あります、直ちに友を擇ぶと云ふ處だけを御

話すれば宜いと思ふのであります、前を大略申しますれば、之から東西南北上下の六方に向つて禮をするに就ての心得を能く自分の心の中に引取つて守るのであるぞと注意を與へて五十六箇條を説かれたのであります、前の段には第一殺生をしてはならぬ、第二には人の物を竊み取つてはならぬ、第三には他人の婦女を愛せず、第四には妄言兩舌せず、虚言を云ふてはならぬ、人は萬物の靈長である、虚言を云つたら人間でない、人の守るべき事は誠であります、我國のまこと……平假名でも片假名でも三字であります、それを支那の人に知らせるには少くとも二十五字見せなければならぬ、此事も先日御話をしましたから、本が出来て御覽になれば分ります、まことは人間の守るべき大切なものである、誠は妄語せざるより始まると云ふ事を司馬温公も言つて居ります、餘程味ふべき事と思ひます、又印度の書物には譬と云ふものを廣く用ゐてをります、印度では今日は我國と同じく太陽暦を使つて居りますが、昔は満月を中心として一日から十五日までを白の半月とし、十六日から三十日までを黒の半月として、黒白の次第で一箇月とな

るのであります。そこでそれに譬へてある。即ち丁度月が段々と十六夜から三十日まで欠けて行つて到頭見なくなつて仕舞ふのが前に申した四の訓誠を守らぬやうなものである。一日から月が段々満月となるのが四の訓誠を守つて自分の心の中に悪い心が出たら之を抑止して行き丁度満月になるやうなものであると言つてあります。今一つ妙な事を言つてあります。それは六箇條になつて居る之を注意しなければ折角親なり先祖なりが骨を折つて金銭財産を澤山残して呉れても、錢財日々に耗減すと言つてある通り無くなつて仕舞ふ其の六箇條の第一は飲酒を喜む……酒を飲むことを好む、それが段々増長して行くと財産が少くなる。第二は博掩を喜む、之を以て三千年の昔に印度で博奕が行はれて居つたと云ふ事が分る。第三は餘程可笑い事があります。早臥晚起を喜む、支那では勉強することを夙に起き夜に寝ねと言つて居ります。早臥は早く臥す、晩起は晩く起きる。全く勉強の反對です。さう云ふ事を好むと成ると財産が無くなつて仕舞ふ、それから第四は客を請ふことを喜む、又人をして請はしめんと欲すとあります。こ

れは御客に来て下さいと云つて人を招くことを好み、又人にも自分を御客として招いて呉れるやうに望む。始終さう云ふこと計りをして居ると、澤山な財産があつても遂には無くなつて仕舞ふと云ふ誠であります。第五、悪知識と相隨ふを喜む、知識と云ふのは朋友です、それで悪知識とは悪い友人と云ふことであります。其の悪い朋友と云ふものが非常に詳しく言つてあります。それを御話して見やうと存じて今晚出ましたのであります。悪知識即ち悪い友人と交際することを喜むと先祖なり親なりから傳へられた所の財産又自分が働いて貯へた物も必らず増して行くものでない。無くなつて仕舞ふ、それから第六は、傲慢人を輕んずる、自分は豪い者のやうに思つて誰でも彼でも輕蔑する、他人が親切に氣を付けて呉れる事を聴きませぬ、斯う云ふ六箇條があります。前に申しました四箇條を破り此の六箇條を行ふと云ふことになれば何うする譯にも行かぬ、それであるからして丁度今から六年前に、先帝陛下より明治四十一年十月十三日附を以て下し賜はつた御詔勅にも宜しく上下心を一にして忠實業に服し、勤儉産を治め、惟れ

信惟れ義醇厚俗を成し華を去り實に著き荒怠相誠め自強息まざるべしと仰せられてあります。

扱て之から朋友を擇ぶと云ふことになつて居りますが先づ第一に悪知識に四輩あり第一は何であるかと云へば内に怨心ありて外に強ひて知識と爲る心の中に怨む心がありながら表面だけ強ひて朋友となつて居る之は油断がなりませぬ之は論語にもあります怨を匿して其人を友とする左丘明之を耻づ丘も亦之を耻づとあります何彼に就けてさう云ふ者は油断がなりませぬさう云ふやうな者は左丘明と申す人が耻かしいと言つたが丘とは孔子の實名で此方に於ても耻づると云はれてあります其の意味であります心の中に怨がありながら他に強ひて友達となつて居る者は油断がならぬ。

第二には人の前に於て言語を好くし背後には説いて悪を言ふ此れも油断がならぬ私の前では好い言葉で言つて下すつても背後では悪を言ふ悪口ばかりを言ふそれは私が悪口を言はれるやうな失策があれば仕方があり

ませぬけれども向つて言ふ事と背後で云ふ事が全然違つて居る者は油断がならぬと云ふのであります。

第三は急ある時は人の前に於て愁苦し背後には歡喜す日本の御方には斯う云ふ人は一人もありませんまいが印度ではあつたものと見えます急に想ひも寄らぬ心配がある時にア、御氣の毒ぢやと言つて呉れる非常に同情のやうであるが背後では快い氣味ぢやと云ふさう云ふ朋友に交つてはい

かぬ。第四は外には親交の如く内には怨謀を興す目に見わた處では親厚即ち親切のやうに見せかけて心の中には怨の謀を考へて居るさう云ふ者は油断

がならぬそれぢやから朋友を擇ぶと云ふことが必要であります。今度は反對です善知識にも亦四輩あり私の爲めに善き所の朋友と云ふ者も數へて見れば四通りあるぞと云ふことであります第一は外怨家の如くにして内に厚意あり初めの附合は悪いやうに思はれるが交れば交る程親しい私が明治九年から十七年まで英吉利に居りましたが他の國は許する

ことが出来ませぬが、英吉利の人が皆が皆ではありませぬけれども、私未だ横文字の讀書が出来ませぬ時に行つたのであります。私の交際をした人が皆善いと云ふ譯には行きませぬが、七年間交際して愈々御別れする時まで、毫も變らず親切にして下された人が、澤山あります。漸次故人になつて居られますが、初めは交り難いやうですが、段々交際を長くして居るほど親切が分つて来る。

第二は人の前に於ては直諫し外に於ては人の善を説く、これが眞箇に善い朋友と思ふのです。人の前では悪い事があると直諫する、正直に諫める、さうして外の處では斯う云ふ意見をしたらと吹聴して歩かぬ、彼者は随分心得が宜いと善い方ばかりを吹聴すると云ふのであります。其の例として徳川家康公が静岡より二代將軍の御臺所に贈られた手紙の文句を引證せらる。何か斯う云ふ事を守つて行きたいと思つて居ります。

第三は病瘦縣官あらば其の爲めに征徭として憂ひて之を解く、朋友が病氣で、あるとか又は何か嫌疑を受けて吟味を受けると云ふことがあれば、朋友の交誼でありますから、非常に心配して醫師の周旋をすることか、或は證據人に出かけて罪のないことを申開くとか、するとか云ふのであります。

第四は人の貧賤を見れば棄捐せず、當に方便を求め之を富まさんと欲すと念ふべし、之は古い反譯で少し言句が誤手突いて居りますが、自分の朋友が富有であつたのが、何かの事情で貧乏になつた、身分の高い人が賤しくなつた時に富有な時だけ交つたと云ふやうにしないで、見棄てないで、生活を樂にして上げたいと心配する、之が善き朋友であります。

今度は復悪知識に四輩あり四通りある前のは、私に向つて来るに就ての場合、今度は先方が云ふ事を聴くか、聴かぬかと云ふ方に就て、悪い朋友が四通りあると云ふのであります。第一は諫曉し難し、意見し難い、何と謂つても聴かぬ之に善を作せと教ふれば故らに悪者と相隨ふ、其様な事は止めて善い事をやつては何うぢやと注意すると入らざる御世話ぢや、彼奴彼様な事を云ふから乃公は悪い人を探して朋友になつてやらうと云ふやうなものであります。

第二之に酒を喜む人と伴と爲る莫れと教ふれば故らに酒を嗜む人と相隨ふ、餘程面白いですな毎日酒を飲んで仕事をしない人と交つては御前さんも仕事が出来ますまいと云へば入らざる御世話やもつと酒を飲む人と交つてやらうと云ふ困つた者です、さう云ふ者が天竺の横町には居つたものと見えます。(笑聲起る)

第三は之に自ら守ることを教ふれば益々更に多事なり、貴方のやうに彼事にも此事にも手を出して居つては一も取らず二も取らずになりますから専門の事を御遣りなさいと云ふと乃公は一事でも宜いが、彼者が如彼云ふから、彼事にも手を出さう此事にも手を出さうとやる、益々更に多事なり、困つたものです。

第四は之に賢者と友となれと教ゆれば故らに博掩子と厚を爲す、之は古人も己れに如かざる者を友とする莫れと謂つて居ります、貴方は少しでも勝つた人を朋友としたら何うかと親切に言つて遣ると、故らに態々博掩子即ち博奕打と云ふやうな人と交際する、困つたものです、之は悪い友に注意

せよと云ふのであります。

今度は復善知識に四輩あり、第一は人の貧窮卒乏を見れば生を治めしむ從來交つて居つた朋友が何うかして貧乏になりますと種々親切にして生を治めしむ、さう云ふ風に此方から注意を與へる。

第二は人と諍ひ計校せず、何であらうとも朋友と些細な事を諍はない、大眼に見て行く、それが朋友の好誼であります。

第三は、日に往いて之を消息す、近い處ならば何うして暮らして居るか日々に行つて訪問して遣る、遠い處ならば手紙を出して尋ねる、之が善き朋友であります。

第四は座起當に相念ふべし、之が善き朋友と思ひます、私共は此一つだけでも實行したいと思ひます、座るに附けても起つに就いても相念ふべし、朋友は皆さんも御經驗があります、幼少な御方にも心得があります、私にも親友もあれば兄弟もありません、今度歸途には妹は故郷から隔つて居りますから兄と弟には逢つて行かうと思つて居ります、此れは朋友に因んで申し

たのであります。座起相念ふべし、之が即ち眞に善き朋友であります。之で善と惡と二組宛濟みました。

今度は復善知識に四通ある。第一は、吏の捕ふる所となれば將の歸つて之を藏匿し後に於て之を解決す、之は自分の友達が何か眞に心得違をしたならば仕方がありません。が何かの間違ひで嫌疑を受けて捕へられて吟味を受くるやうな時があつたならば此の者は私の朋友で其様な不心得は致しませぬと充分申開きをして其者を助ける所の法を考へる、之が善き朋友です。

第二は、病瘦あらば將の歸つて之を養視す、朋友が病氣であつて誰も他に世話する者がなかつたならば眞の兄弟の如く病人を自分の方に引受けて世話をしてやる。世間動もすれば病氣のない間は親切に交つて病氣になると振棄てゝ顧ないといふ者がある、それは惡友です。

第三は、知識死亡すれば棺斂之を視る、朋友が何うかして死亡した其時には、朋友の交誼ですから、寄つて集つて棺桶の中に斂めて葬式萬端の世話をする。

第四は、知識已に死すれば復其の家を念ふ、朋友が死んだらそれで役目が濟んだのではありませぬ、朋友の後の家の事を考へてやる、之が親切なる朋友であります。

尙善知識に四通ある、今度は何う云ふ人かと云ふと、少し朋友が荒々しい時の心得であります。第一、鬪はんと欲せば之を止む、鬪は喧嘩です、詰らぬ事に鳥渡した事で腹を立てゝ喧嘩口論をするやうな事を好む朋友があればさう云ふ詰らぬ事は爲さるなと止める。

第二は、惡知識に隨はんと欲せば之を諫めて之を止む、惡い朋友と交はらうとする時は意見を止めて止めさせる。

第三、生を治むることを欲せざれば勤めて生を治めしむ、生は生命財産の生であります、勤儉産を治めと仰せられたと同じ意味合の言葉と思へば宜い、生命を保つ所の財産を取縮ると云ふことに注意しないと云ふ人があれば何度でも手を替へ品を替へて取縮りをさせるやうにする。

第四、經道を喜ばざれば之を信喜せしむることを教ふ、經道と云ふのは御經

の上うへに説といてある道みちと云いふ事ことであります吾々われわれ専門せんもんの經文きやうもんには人ひとの守まもるべき道みちが教しよへてある又大また日本にっぽん帝國ていこくの臣民しんみんと云いふ肩書かたがきを持つて居ゐれば教育きよくの御勅語ごていごにある斯道そだうは……と仰おほせせられた道みちであります之これは必かならず守まもつて行くのが當然あたりにありてありますそれを守まもらぬ人ひとがあれば親切しんせつに教しよへて信しんじて喜よろこぶ如何いかにも之これを守まもつて行ゆかなければ人ひととして活いきて居ゐる價値ねいちがないと云いふことにまで教しよへる之これで善よき朋友ともだちが十六通じゅうろくつうになつて居ゐります今度こんどは悪い朋友わるいともだちが復また四通よんつうある第一だいいち、小こしく之これを侵おこさば便たち大おほいに怒いる困まつたものですな、少せうくばかりさう云いふ事は御止ごとどめなさいと云いふと非常ひじょうに怒いつて仕舞しまふ、大變だいへんに憤いり出す斯かう云いふ人は恐おそろしい之これは悪い朋友わるいともだちです第二だいに、急きゆうあらば之これを借かり使つかすれども肯あて行ゆかず、此方こなたに何か急きゆうな事ことがあつて人ひと手を借からねばならぬと云いふ時に、朋友ともだちの好誼こうぎちや手傳てでんひに來きて下くださいと頼たのむと、彼奴あいつ頼たのみに來きたから行いつてやらぬと殊更ことごとに來きない、斯かう云いふ人は仕方しかたがない、

第三だいに、人ひとの急きゆうあるを見みて時ときに人ひとを避さけて走はる、自じ分の朋友ともだちに急きゆうな事ことがあると、

此方こなたが頼たのまぬ中なかに逃にげ隠かくれて仕舞しまふ、

第四よんに、人ひとの死し亡ぼうを見みれば棄すてて視みず、朋友ともだちが活いきて居ゐる間まは世話せわをするが死しんだら後あとを構かまはぬさう云いふ人が随分ずいぶん或國あるくににはあるかも知しれませぬ、悪い朋友わるいともだちです、

甚はなだ面白おもしろい御話ごはなしではありませぬが、佛ほとけが天竺てんぢくの尸迦羅ししからと云いふ長者ちやうじやの主人しゆじんを見み附つけられて、先まづ友ともだちを擇えらんで掛からなければならぬと、此誠このまことをせられたのであります、

さて其次つぎに、佛ほとけ言いはく其そのの善ぜんなる者ものを擇えらんで之これに従したがひ、惡あくなる者ものは之これを遠離とんりせよ、我われれは善知識ぜんちしきと相隨あひしたがひて自みづから佛ほとけと成なるを致いたすとあります、其善そのぜんなる者ものを擇えらんで之これに従したがへと善よき友達ともだちを十六通じゅうろくつうり並ならべ、惡あくなる者ものは之これを遠離とんりせよと惡あくしき友達ともだちを十二通じふにつうり並ならべてあります、三人さんにん並ならんで歩いて右みぎの人ひとが行儀ぎやうぎ正ただしく行いくならば、其そのの人ひとに倣なふと云いふやうに見みて行くのが即すなはち其そのの善ぜんなる者ものを擇えらんで之これに従したがふのである、惡あくなる者ものは之これを遠ざけ離はなれよとは交まじはる時に其そのの人ひとの性質せいしやうを能よく考かんがへなければならぬと云いふ事を教しよへられたのであり

ます。之で友を擇ぶと云ふ事は皆さん御承知になつたと思ひます。朋友と云ふことは天竺に於ては二語あります其の一はミトラ Mitra 英語で云へばフレンドであります此のミトラは慈愛……親切と云ふことであります今晚私の爲めに是れだけの御方が慈愛心があつて御集りになつたのであります之が朋友です慈愛です又其二はスフリツド Sufird 英語のグウドハート善き心であります皆さんは私の善き心と云つたら如何でせう鳥渡分りませぬが私に對して善き心を持つて御出で下さる御方と云へば分るでせうそれであるから私の話を聞いて下さると云ふことになりなす(それより無言上人の話ありて後)何うか精神身體共に御健康で御國の光を益々輝かせられんことを願ふのであります。

友を作り敵を作る、其責己に在り。

(ヘンリー、ワード)

侍吾有侍

(十一月二十八日 旅順水交社に於て
十一月十六日 鐵道陸軍將校集會所に於て)

私は今晚初めて皆さんに御出會ひするのであります、これから一時間ほど御話を致して見たいと思ふのであります。御話する題と申すべきものは四角な字を四箇出しまして其の四箇の出處を御話を致し、さうして有名な御方の御話を致して見やうと思ふのであります。四箇の字之を棒讀にしますると侍吾有侍……吾が待つ有るを侍むと云ふ四箇の字であります。此の四字は何に出で居るかと云ふと支那で古い書物で孫子と云ふ兵書——これは孫子と云ふ人が書いた本で、十三篇に別れて居ります、我國では武田信玄などが好んで此の書物を読んで居られたと云ふ事であり、其孫子十三篇の中央位の處に此の言があります。戰の事を論じて來て、故に兵を用ゆるの法は其の來らざるを侍むことなけれ、吾に以て之を待つ有るを

待め其の攻めざるを待むことなけれ吾に以て攻む可からざる所あるを待
 めとなり」とありす、支那では種々の人が孫子に註釋して居りますが、其の
 中に魏の武帝曹操と云ふ人、あの赤壁の戦に、衆を横へて月明かに星稀に鳥
 鵲南に飛ぶと云ふ詩を吟じて戦争に出たと云ふ、其の人の註がありまして
 之れを魏武註と云ひますが、日本にも大きな版本になつて居りまして、私も
 四十何年間持つて愛讀して居ります、其の曹操の註は僅か八字であります
 「安きに危きを忘れず常に備を設くるなり」とあります、油斷大敵危急存亡の
 秋が起るから夫れを忘れてはならぬと云ふ事で常備艦隊とか常備軍とか
 云ふ常備と云ふ字がチャンと此處に出て居ります、常に備へを設くるなり、
 何時でも來らば來れと備を設けて置いと云ふことを孫子が申したのであ
 らうと存じます、如何にも私は此の言が面白いと思ひます。
 御維新前、慶應二年十二月から三年一箇年と其の翌年慶應四年此の年御維
 新となつて九月八日に明治と改元せられました、其の一月まで私は岐阜
 縣大垣で僧兵となつて、晝は鐵砲を擔いで太鼓の音に足並を揃へ、夜は兵書

を讀んで戰の事を研究して居りました、餘談は省くこととして彼の孫子は
 戰をする事を論じた本であるから兵を用ゆるの法とありますが、兵を心と
 換へて仕舞へば、後は其の儘で私共専門の宗教の御話が出来るのでありま
 す、夫れだから非常に面白い、心を用ゆるの法としたら如何です、吾々生れた
 と云ふ始があれば死と云ふ終りがある、今日夜が明けたら暮れるに極つて
 居る、無常の風は何時吹いて來るか知れぬから心を用ゆるの法であります、
 此の事を簡単に孫子の言に就て御話をして、後有名なる人が愈々明日死す
 ると云ふ決死の前日と云ふ事に就て御話をしたいと思ふのであります。
 吾に待つ有るを待むと云ふ四字を以て宗教の御話を私は四五年前致して
 居ります、當地に参りまして深く感じますのは明治三十六年の十月私
 の關係して居る東本願寺の別院の本堂が静岡に建立せられました、其時本
 山から出張を命ぜられて静岡に参りました、即ち日露戦争の前年でありま
 す、其の日は丁度日曜日でありましたので、其の時の静岡の第三十四聯隊の
 聯隊長殿を首めとして將校方が打ち揃つて別院に御出で下さいました、私

が其處に出ますると、聯隊長殿が「ア南條さん暫く……と来た顔を見ます」と、私と同郷の出身で折々東京で御出會ひした關谷銘次郎さんでありますから、オ、關谷さん貴君は何時此處に御出でになりましたかと云ふと、關谷さんは實は急の赴任で御暇乞に行き事も出来なかつた、兎も角將校が打ち揃つて来たから何か吾々平素の心得になるべき事を伺ひたいと申されました。夫れでは本堂での式は午後であるから午前は差支ないと思ひますから本堂に御出で下さいと云つて、其の時孫子の吾に待つ有るを待むと云ふ事を稍暫らく御話をして別れましたが、其の翌年三十七年に戦争が初まつて、第二軍の第一師團と第四師團とが廣島へ進發になつた其の時に人に随つてですが、私も慰問の爲めに廣島に参りまして、伏見宮殿下にも拜謁を致しまして、二日の間皆さん方を御訪問して最後に第三十四聯隊長の關谷大佐を訪ねました。すると聯隊旗を床上に飾つて關谷さんが一人端座して御出でになつた其處に参りましたら、關谷大佐が「去年静岡で吾に待つ有るを待むと云ふ御話を承つたが存外早く其の實行が出来ることになつた確

かにやるから、安心して歸れと云ふことでありました。大きに御邪魔をしましたと云つて別れましたが、之れが顔の見納めであつた三十七年八月三十一日、首山堡の戦争で三十四聯隊は殆んど全滅と云ふ位で、爲めに大佐殿も名譽の戦死を遂げられました。其の遺骨が静岡に参つた時、其の葬儀に態々私も東京から参つたことがあります。斯うして此の地に参りまして皆さんに此の御話をすると、就て立派に戦死をなされた關谷大佐殿の忠魂は必ず此處に現はれて聽いて下さると思ふと、非常に私は何と申して宜いか或る物を深い腹の底から實感して居るのであります。斯様な事を申上げる必要はありませぬが、感じた餘り申上げた次第であります。扱て兵を用ゆるの法も心を用ゆるの法も目指すものは敵である、敵は眼に見ゆるものもあるが、眼に見ぬ敵もある、吾々の心を誘惑する敵は吾々を誠ならざる方に引出さうと考へて居る、即ち煩惱であります。此の煩惱と云ふ賊兵が吾々に不利益を興へる所のものであります。そこで此の賊が來らざると云ふことを待むこと勿れ、來ないからと云つて居る間、つい眼の前

に来て居る之を分り易く云へば此の一つより無い人間の生命を今取つて行かうと云ふ無常の風がある此の無常の風に一度捉まへられたら生命は無くなる夫れだから常に用心をせねばならぬ其の生命を取つて行かうと云ふ無常の風が来らば来れ此方には用心があるぞと宗教で云へば一つの信念があつて何れ一度は死なねばならぬのであるから詰らなく生命は棄てぬ此の生命を忠義の爲めに棄てる云ふ場合は躊躇しないと云ふ覺悟のあることでありますこれが其の来らざるを待むことなかれ吾に以て之れを待つあるを待むと云ふことであります其の攻めざるを待むことなかれ敵が攻撃して来ないと云ふことを待みにしてはいかぬ何の様な勢を以て何の様な謀を運らして来ても我が心の中に一寸一分の隙間がないやうにちやんと備へがしてあると云ふこと即ち攻む可からざる所あるを待むと云ふことを孫子が説いて居る夫れを武帝と諭せられた魏の曹操が安きに危を忘れず常に備へを設くるなりと簡明に註して居るのであるやさしく言へば油断大敵と云ふことがあるから常に備へを設けて用心をしる

と云つたのであります之れを私が十八九歳の時から讀んで此の兵の一字を心の字に換へたら眞宗の説教が出来ると思ひつきまして明治九年から十七年まで英吉利に居る間でも日本人が寄集つた席で私に簡單な話をしると望はれた時に私は此の侍吾有侍の話をしたので復た侍吾有侍かど他人が云ふやうになつた此の度皆さんに御話をすると皆さんの日なされて居る御仕事に就ては何も御注意を與へると云ふやうな事は私に力がありませぬから出来ませぬが眼に見えない心の踏むべき道は私の専門であるから御参考御話したいと思ふのであります併しながら皆さんは御國を離れて當地にまで御出掛けになつて居られるのでありますから無論立派な御決心はありませうと思ひますから何を申しても御役に立ちますまいが只精神修養の御参考になるやうな御話をして呉れよと云ふ會社からの御依頼で及ばずながらやませうと云つて出て参りましたのでありますから何か御話をしなければならぬそこで楠公決死の前日と云ふことを御話しやうと思ふのであります忠臣楠正成公と云へば何誰

も御承知であります。楠公は建武三年丙子の年、延元元年と年號が變つて舊曆の五月二十五日、湊川に於て手兵七百騎と共に残らず戦死を遂げられた。其の前日五月二十四日であります。即ち決死の前日である。其の決死の前日に楠公が如何せられたかと云ふことを御話しやうと思ふのであります。私は明治四年に美濃の大垣から越前の南條郡北杣山村の憶念寺と云ふ寺に養子に参りましたもので、此の憶念寺は楠正成公の舍弟正季の其の次の弟であつた惠秀と云ふ僧に由て建てられたと言ひ傳へられて居ります。此の惠秀と云ふ僧は天台宗の人で、天台の本山の叡山の僧兵は一時なか／＼強かつたのです。此の惠秀と云ふ人は初めは越前の平泉寺と云ふ寺に居られたのですが、平泉寺が後に北朝の味方となつたので不愉快を感せられたものと見ゆ、平泉寺を去つて憶念寺を建てられた。私が今住職となつて居る憶念寺の前の山には杣山城の趾があります。此の城は瓜生保と云ふ人が南朝に御味方をして守つた城であります。惠秀律師は夫れを頼つて來られて、父祖兄弟一門を追弔する爲めに憶念寺を建てられたものと見ゆ。

私より四代前に寺は全焼しましたので記録は存して居りませぬが、口碑に傳つて居るので寺の徽章には菊水の紋を用ゐて居ります。之は必要のない御話であります。私が楠公の御話をするに就ての縁を申したのであります。

楠公が足利直義を邀撃する爲めに兵七百を率ゐて京都を出立した其の時の事が日本外史にも書いてある。正成素より生還を期せずとあります。夫れであればこそ櫻井驛に於て有名なる訣別をして正行公を残されて湊川に出陣せられたのである。今日の神戸ですな。人家も多く繁昌であります。其の頃の神戸は餘り家がなかつたらしい。兵庫は古くから多少家があつたらしい。兎も角神戸の地は戦をするに好き場所には違ひない。此の戦の原因は御承知の通り、足利尊氏が後醍醐天皇様に反旗を翻へした爲めに、新田義貞と楠正成公が協力して之れを撃ち破られた爲めに、尊氏直義の兄弟は九州に落ちたのであります。が、悪運強くして西國九州を伐り從へて、尊氏は海軍直義は陸軍の大將となつて都に攻め上ると云ふ通信がありましたので、新田

義貞は尊氏の海軍に當ると云ふことになつて和田の岬に陣を張つて居ります。楠公は直義の陸軍に當ると云ふので湊川に出陣せられたのであります。前に申しました通り手兵七百人である所が直義の軍は五十萬と稱して居るのであるから、果して五十萬の兵が居つたか何うかは分りませぬが、鬼も角大兵を率ゐてやつて来る、それを僅か七百人で喰ひ止めやうと云ふのでありますから、勝敗の數は既に定つて居るけれども、勅命でありますから死を決して出陣せられたのであります。正成素より生還を期せずであります。

今日の神戸に多聞通と云ふ町がある、其處に別格官幣社で湊川神社と祀られて居られますのが楠公であります。此の湊川神社の正門は南方に向つて海に面してあります。其の東西兩面にも門があります。其の西の門を出て真直に行き當ると今日でも一寸爪先上りと云ふやうになつて坂があります。して其坂の上に一寺があります。私は二度まで參詣して來た寺の名は醫王山廣嚴寺と云ひます。此の寺は臨濟宗で、昨年當地方を巡錫せられた釋宗演

禪師の方の宗派でありまして、其の本尊は藥師如來であります。此の寺は如何なる人が建てたかと云ふと、支那から渡つて來た僧で、楚俊字は明極と云ふ人であり、此の僧は後醍醐天皇の前の御代花園天皇の時代に日本に招聘せられて來た人でありまして、初め京都の建仁寺に宿を取つた朝廷より禪宗の宗旨に就て御尋ねがあつたから、直様筆を執つて御答をした、それが御思召に叶つて佛日談禪師と云ふ號を賜はつた、さうして後醍醐天皇の時に兵庫の町の側に廣い寺地を賜つて、勅命に因て寺を建立して、夫れに居つた其の寺が廣嚴寺で、明極和尚が開山であります。其の中に戦争が始まつた。

楠公が愈々明日は五十萬の敵を引受けて七百人の手勢で戦ふと云ふ延元元年五月二十四日即ち決死の前日であります。自分の陣地から高臺を仰いで廣嚴寺を見られ、坂を上りて廣嚴寺に出掛けられまして、明極和尚に逢ふなり、問答を始められた。「生死交謝の時如何之が吾に待つあるを待むと云ふことに當て嵌められますのであります。生と死と二つに分けて其の交替

の時如何と問はれたると明極和尚は「兩頭俱に截斷して一劍天に倚て寒し」と答へられた生と死と兩頭即ち兩方共トン／＼と切斷して、もはや切るべき物がなければ、血の附いた劍を振り廻はして居るに及ばぬ不用の劍は打ち棄てて仕舞つて他の仕事に掛つて宜いではないか、劍を高く抛れば何れ地に落ちて來るが暫くは一劍天に掛つた鹽梅で寒く光る兩頭を切斷したら一劍も奇麗に棄てて仕舞へ、惜いと云ふことでは眞箇に棄てたのではない、生きて居らうが死のうが宜いではないか、生ぢや死ぢやと云ふのは第二の問題で御座ると云ふやうな鹽梅であります、兎も角も一問答済んだ其處で楠公は鋭く切り込んで「落處作麼生落著く處奈何と來た長たらしい事を聽いて居る時でない戦争をして居る時でありますから激しく切込んで行かれたると待つて居ましたと云ふ鹽梅で、明極和尚が威を震つて一喝せられた其の一喝に因て楠公起立三拜通身汗流ると書いてあります、明極和尚の腹の底から出た喝」と云ふ一聲が楠公の腹の底に浸み込んだから汗びつしよりになられて、三度起立して最敬禮をせられた其様子を見て和

尚は「備徹せり」と言はれた即ち印可を與へたのであります、そこで楠公は若し來りて和尚を見ずんば安くんぞ向上の關捩を超出することを得ん、今より世々針芥を失はざらんと言はれた之れは今日此の廣嚴寺に來て貴僧を見なかつたならば私の精神が向上の關捩即ちネヂを超出して仕舞ふことがどうして出來ませう、今日二つの問答を致した爲めにもはや心配はない、今より世々如何様な事に出遇つても針の先程も塵芥程も精神の方向を失はぬ私は決心したと云ふことであります、和尙が「備の問酬は舊參に下らず平居却りて幾箇の宗匠を見たりしや」と問はれた之れは貴君の問答は慣れたものだが、之れまで幾人の宗旨の師匠に相見して斯う云ふやうな問答をなされたかと言はれた、夫れから楠公が一場の昔話をせられた。

「某甲少きより誠を禪門に傾け、隨を宗乘に探る」と云はれた、此の自少傾誠の四字を私は非常に感心をして居ります、精神の修養と云ふものは一朝一夕には出來ぬ、やはり少きより誠を傾けてやらねばならぬと考へます、それからの語に「一日南都に赴く路片岡を経て一禪者に逢ひ、頗る疑ふ所を質すと

あります、或日河内から奈良に行かうとして片岡と云ふ處を過ぐる際に一人の禪宗の僧侶に逢つたので平生疑つて居る所を質したと云ふのであります、其の僧の名は何と云ふか出て居りませぬが、惠玄と云ふ人であらうと云ふことであります、惠玄と云ふ人は明治天皇陛下から無相大師と大師號を贈らせられた名僧で又關山國師とも云ひ京都の妙心寺派の開山であります、何うも其の人に途中で御遇になつたやうであります、其處で平素心に疑を懐ひて居つたと云ふことの質問を始めた無相大師は、此の軍人は非常に熱心の方と思はれたから親切に答へられたと見ゆる其處で楠公の疑ひも解けた、夫れから楠公と連れ立つて行かれたが、雙方共に暫時無言で何の話もありませぬ、其處で楠公が「某甲却りて進み問ふて曰く猶ほ密旨あることなきや」と云はれて私は御尋ねをすることはないが、貴方はドン／＼御話をなされて宜さうなものだ、私に對して秘密を守つて居られはしませぬかと云ふ問であります、是は楠公が精神上の研究に熱心な證據で愈々深く進まんごせらるゝ誠から出た問であります、實は平素の疑問を質するため

に今まで自分の姓名を名乗ることを忘れて居られたさあ其處です、秘密の有無を同行の禪僧は答へずして僧曰く公の名は如何とある、面白い道方ですな、貴方の名前は何んと言ひますかとやつた、其處で楠公黙して居る譯にはいかぬ、成程先刻から疑を尋ねたら親切に答へられたさうして猶ほ秘密なきや否やと尋ねたら名前を聞かれたから某甲答へて曰く楠多聞兵衛正成とあります、河内の志貴山の頂上に毘沙門天が祀つてあります、毘沙門と云ふのは梵語のグーイシユラヴナの音譯で義譯すれば多聞と云ふことになり、楠公は其の毘沙門天の申し子である、と云ふので、幼名を多聞丸と申し、後多聞兵衛正成と名づけたのでありますから、楠多聞兵衛正成と答へられたと云ふと、僧正成と呼ぶ某甲應諾すとあり、僧が正成と呼んだから楠公ははいと答へられた、其處ぢや正成と呼んだ、はいと答へた時に僧曰く這の裏は、是れ什麼の在る所ぞ、某甲是に於て心中豁然として悟るとある、此の問答の中に分別とか考とかあるか、何にも有りは致しますまい、夫れだけの事だと云ふやうに、何の秘密もないと云ふことを承知されたのであります、

御前さんの方から何も尋ねもせぬことをベラ／＼喋舌つた所で、氣に適るか適らぬか分らぬ夫れで黙つて居つたのだと云ふやうな意味であります。其處で正成公も此の坊主骨がある哩と思はれたので、此れより後常に此の僧に請ひしは／＼慈誨を蒙る或る時某甲問て曰く道を以て軍に勝つことは如何僧曰く至善を兵とせよ某甲服膺して忘れずとある即ち其後は自分の邸宅に招いて種々話を聴かれたと云ふことであります。それで或る時楠公が其の僧に向つて道を以て軍に勝つことは如何と尋ねられた道に叶つた軍をして勝つには何う心得たら宜いかと尋ねたさうすると其の和尚が僅か四字で至善を兵とせよと答へられた至善此の上もない善第一等の善を至善と云ふ夫れは何ですか誠です何時まで何處までも變らぬ誠を兵となされよと云はれた誠を兵として戦つたら其の戦鬪たるや勝に定つて居る夫れが道に適つて居るのであります。楠公はさう云ふ人に數次會つて斯う云ふ問答をして精神を修養せられたのであります。至善を兵として行けば假令兵が少くとも誠心で勝つて見せる之を悟つたのである。其の次に

は此の僧故里に歸り幾ばくならずして入寂せり某甲道を問ふこと僅かに八箇餘月只恨むらくは勝縁淺薄なることを然りと雖も斯の道を會得せしよりこのかた兵を用ゆること自在にして機に對すること無礙なりとて私の經驗は此の通りですと話された。此昔話を楠公がなさると明極和尚は善哉多年作家の爐竈に入らずんば焉んぞ今日の事あらんと云はれたのであります。此れで分りました。今の御話を承はれば少き時より長い年の間立派な人に出會つて精神を鍛錬せられたればこそ今日此の通り分つたのである。何うして唯二番の問答ばかりで徹底することが出来やう。多年の御心懸け感心したと云ふ御挨拶であります。夫れからは正成琉璃殿内に入り醫王を拜し香火の縁を結んで出づ。禪師門送すとある即ち正成は進んで琉璃殿内に入る私が廣嚴寺に參詣した時に本堂に向つた處に琉璃殿と云ふ額が上つて居りました。醫王山の醫王は薬師の別號で、薬師は略語で、具さには薬師吠琉璃光如來と支那では申します。梵語ではブハイシヤチユヤグルグーイドウールヤブラブハーサと申

して長い名であります私は此の梵語を専門として學んで来た一人でありますから忘れないやうに喋舌つて居りますので甚だ御迷惑であります其の薬師如來が本尊でありますから瑠璃殿と云ふ額が悪つて居ります公は其處に參られて禮拜せられたのである伊藤仁齋先生は儒者である曾て花見に行かれた時に寺に入つて佛に向つて禮をされたすると弟子が先生貴方は儒者ではありませんか佛に頭を下げられるのは何う云ふ理でありますかと云つたら先生が夫れは御前達の心得違ひと云ふものである寺では主人が佛である和尚は番頭である其の番頭や手代に挨拶をしながら肝腎の主人に挨拶しないと云ふことがあるかと云はれたと云ふことでもあります兎も角楠公は薬師如來に禮拜して出られたすると明極和尚は門まで送つたと云ふのであります而して其の翌日立派な戦死を遂げられたのであります

翌日になりますと足利尊氏の海軍は和田岬の沖の方をすん／＼と通りぬけて行きますから新田義貞は之れは此處に上陸せずして都を指して行く

様子と思ひましたから義貞は和田岬を明けて陸に循て進んだ尊氏は先鋒をして都を攻めるやうに見せて義貞が追蒐けて行つた後に中軍以下を和田岬から上陸させたさうして楠公を背後から攻めて来た日本外史に由て見ますと楠公が弟正季に向つて我れ腹背敵を受けて遁るべからず先づ前なる者を破つて而て後背なる者に接せん如何と云はれたのが夫れです其處で兄弟並び突きて足利の陸軍に攻め入り昔の三時今の六時間即ち半日きり／＼舞ひをして敵陣を切り捲くつて七離七遣とも出て居る此の激戦に味方は或は負傷し或は戦死して餘す所僅かに七十三騎となつた夫れでも退却しやうと思へば一道の血路を開くことは出来ぬことはいないが既に生還を期せぬと云ふのでありますから廣嚴寺の地内に在る無爲庵に這入つて甲冑を脱で身體を調べて見られると楠公も十一箇處負傷せられて居つたそれで七十三騎の銘々は順々に自盡したから楠公は弟正季に謂つて曰く死して何をか爲さん死んで何うするかと問はれたら正季が願はくば七度人間に生れて國賊を殺さんと言つた其の時に正成欣然として曰く是

れ吾が心を獲たりさあ死のうと云つて太平記なり日本外史では耦刺して死すとありますけれども廣嚴寺の古文書では昆季列座自殺すとあります何れでも宜い之れで楠公決死の前日竝に當日の状況の御話が済みましたのであります。

皆さんの中にも内地で御聞になつた御方が必らずありませうと思ひますが私共の宗旨の火の消へ掛つたのを八十五年間汗膏を絞つて隆盛にして下すつた蓮如上人先帝陛下より明治三十二年三月二十二日慧燈大師と大師號を賜はりました此の御方より薰陶を受けた弟子で法敬坊と云ふのがあります此の人は非常に熱心な人であつた或る時他の人が遠方から草鞋掛でやつて来て貴僧は蓮如上人の御側を御離れにならぬから種々の事を聞いて居られませう何うか私に御話を願ひたいと申入れた法敬坊非常に喜んでさあ御上りゆつくり御話をしませうと云つたので尋ねて来た人は腰を懸け草鞋の紐を解かうとしたすると法敬坊は早や話を仕掛けた忙しない、貴僧は何と言はれたゆつくり御話しやうと仰しやつたではないか

未だ草鞋の紐を解かぬ中から御話になつては忙しないではありませんかどやつたら法敬坊が夫れは御前さんの心得違ぢや遠方から草鞋掛けで訪ねて来て此處でウンといつたら夫れ切りぢや無常の風は草鞋解く暇も待たぬものぢやと云つたと云ふことであります之れは話す方が熱心であつたからである吾に待つ有るを待む禪宗の人であつたから楠公の名を尋ねて楠多聞兵衛正成と答へられたら正成と呼んだ楠公聲に應じてハイと答へられた此の正成ハイで楠公は分つたが吾々では是だけ御集りになつた御方に一人々々御姓名を聞くと云ふ譯に行きませぬが彼方でも此方でも南無阿彌陀佛を唱へて居れば其の間に何も挟むことはない何にも入れないで宜い夫れと同じ理屈で正成ハイ此の間に何の祕密がありませう之れは自力であります唯々南無阿彌陀佛を唱へれば其の間には何の祕密もない之れが他力であります何うかさう云ふ次第でありますから吾が待つ有ることを待む安きに慣れないやうに常に備へを設けて置く何時でも攻めて来い此方には其の用意があるぞと云ふやうに精神身體共に健康に完

至で御國の爲めに益々其の國光を現はされるやうに願ひたいと思ふので、斯う云ふ長い御話をしましたので定めて御迷惑でしたせうが幸に精神修養の上に何か御参考になる點がありましたら私は非常に幸福と思ふのであります、今晚は之れで措きませう。

一心をばいか程もやはらかに持ちて人の教訓

にしたがふべし、教訓する程の人悪しかれとは

思ひ給ふべからず、されば、或る文に十人の言葉

に従へばよき事十あり、百人の言葉に随へば善

き事百ありといへり。

(北條時頼)

攝受折伏

(十一月十七日撫順に於て)

豫て皆さんは我國の歴史を御讀になつて御承知であらうと思ひますが、近くは頼山陽の日本外史の六冊目即ち新田義貞公の一門が天子様に忠義を盡くされた事歴を書いた中に出でゐる即ち後醍醐天皇様の御子様であつて、今日鎌倉の宮として祀られて御出でになります、護良親王と申す宮様が、足利尊氏が讒言を致した爲めに土牢に御這入になつて御果てなされた彼の御方様が親御の後醍醐天皇様に御上げになつた御書面の中の御言葉で山陽の筆では長い言葉を短かく書いてある其の中の四字を、今晚の御話の題と致さうと思ふのであります。日本外史の言葉で云ふと、護良親王の御言葉で「臣聞く佛に二道あり、曰く攝受、曰く折伏、願はくは陛下臣に任ずるに折伏を以てせよ」と云ふ言葉である、親御様であるけれども臣民の一人として天子様に向はせられて臣と仰しやる臣聞く佛に二道あり、即ち印度釋

迦牟尼佛の教に二筋の道がある、第一は攝受第二は折伏であります、此の攝受折伏の四字が之から一時間程御話致すところの題となるのである、攝受はをさめうくる、折伏はをりふせる、全く反對の様であるけれども腹は一つでありまして其の作用は二つになると云ふことである、

護良親王は南北朝の戦争の始まる以前鎌倉の北條高時を滅さうとなされた前は無論天台宗の座主になつて居られたが故に専門の事は御心得になつて居られたのでありますから、斯様な御言葉が出てあるのであります、其の言を今日の御話の口開きに致す丈けであります、言を換へて見れば悲智の二門と謂つても宜い、悲智とは慈悲と智慧でありて、慈悲とは所謂拔苦與樂であります、迷と云ふものほど苦しいものはない、此の身體が此の建物の中に来るに就ても一つ道を踏み迷へば苦しむのであります、勿論皆さんは私より此方に前に御出でになつて夫々爲さる仕事が決つて居ります、其の事に就て私は何も皆さんの御参考になる様なことは心得て居りませぬ、吾々は假令一人でも二人でも私共に時間を借して話を聴いて下さる方さ

へあれば、一人々々が御對手であります、今晚も澤山御集りになつたが私は一人々々に對して御話をする心得である、兎も角眼に見ゆる身體が眼に見ゆる道を右に行くのを左に行つたら、一歩々々目的の處に遠ざかる、皆さんは地理を承知せらるゝ御方私は今日初めて參つたので、車に乗せて下さつたから迷ふことはありませぬが私の申すのは眼に見ぬ精神であります、心得であります、コロコロと轉ぶから之を約めて心と云ふのであります、何う云ふことから迷ひ出すか知れぬから、心の踏んで行くべき道の方角夫れを取り違へない様に云ふ處から教と云ふものが立つて居るのであります、眼に見ぬませぬ心の踏む道でありますから、御話を面白く御聞き取りになるのは面倒か知りませぬが私は成る丈け心易く御話して見たいと云ふ願を持つて居ります、屹度と云ふ御請合は出来ませぬが兎も角平易に言へる丈けは云つて見る心得であります、

慈悲と云ふものは拔苦與樂迷と云ふ苦を心の中から抜き取つて其の代りに悟りの樂みを與へる、之が慈悲であります、何でも彼でも攝受……受取る

之が慈悲の點であります、併し乍ら慈悲と云ふ物に對して智慧と云ふ物がなくてはならぬ、眞箇の慈悲は智慧を離れてないものである、夫れであるから折伏は智慧の働きて先方が間違つて居る事も引受けるとなつては何にもなりませぬから間違つた心があれば其の心の先きを折つて仕舞ひ降伏して仕舞ふ之は智慧の働きてあります、慈悲と云ふ親切がなくては他人の世話は出来ませぬが、夫れをするならば御無理御尤では何んの益にもならぬ、夫れじやからして智慧を以て先方の心得違ひを致して居る所の心の働きを降伏する折つて仕舞つて如何にも私が悪かつた心得違ひであつたと承知する様に致しまするのを親切の上の智慧と云ふので、物の善惡を見別けて行かなければならぬ、此の二つであります、片一方では何にも出来るものでないから、其の點を攝受と折伏としなければならぬと云ふのであります。

此の言葉は何處から出て来たかと申せば印度には種々なる書物がある、其の中に勝鬘經と云ふ經があります、之は勝鬘夫人の説かれた經文であります、して、印度の立派な王様の娘が説かれた御經でシユリーマラー即ち勝鬘夫人と云ふ御方であります、其の外維摩經、法華經、此の三通りの御經は我國に於て千年以前丁度推古天皇の皇太子であつた聖德太子が、此の三經を叔母様であつた推古天皇の前で講釋をなすつたのみならず、筆を執つて義疏と云ふ註釋を御書きなされた、其の三通りの經の中の勝鬘經に今御話をした言葉がある、尙此の勝鬘經義疏が支那に渡つて唐の代に明空と云ふ僧が疏義私鈔と題して聖德太子の義疏に註を書いて居る、其様なことを聽きに來たのではないと御思ひになりませうが、之は私は非常に愉快なことを思つて居ります、推古天皇の皇太子であらせられた聖德太子が書せられた物に支那僧が註を入れたと云ふ様なことは殆ど千有餘年の間も支那の人は知らなかつた、私は一昨年南京で病死した楊文會と云ふ人に此倭漢合註の勝鬘經義疏私鈔一部六冊を贈つたことがあります、此楊文會は池州の人で仁山と號して佛教の古い書物の事に熱心であつた、私共は英吉利や佛蘭西で度々出會つたことがあります、此人の盡力で、金陵刻經處といふものが

出来て種々の佛書を出版して居ります、今も其業を受け継いで居る人があり、ます此れは全く話が横道に入りましたが因みに亡友の名を紹介したまでである。

さて攝受折伏悲智の二門親切計りで賢くないと充分他人の世話が出来ませぬ親切であつても智慧がなければ欺される親切一片と云ふことを附け込んで如何様な無理を仕懸けるか分らぬ智慧は賢い慈悲は親切であり、ます護良親王は後醍醐天皇に願はせられた佛に二道あり、曰く攝受何事でも受收める、曰く折伏他人の心得違を折つて降伏させる、夫れであるから、今日足利尊氏が心得違をして親御様の天皇を苦ませて居りますから、何うか私に尊氏征伐を仰せ附けられたい、不憚の奴でありますから彼を正しい道に立ち復らしたい、折伏して以前の通り忠義正直なる心得にさせて親御様に御奉公さしてやりたう御座ると御願せられたのであります。然るに折角御親切なる御熱心なる御書面でありますが、御執次を申上ぐる者がなかつた爲に土牢で御果てなされたと云ふ事であり、此の攝受と折伏を言

葉を換へて種々味つて見ればなかく面白と思つて居ります、私共の宗旨の方で申しますと攝取と抑止となり、同じ意味でせう佛と云ふ者は慈悲を以て心として居られるから誰でも攝め取つて之を捨てず、之が攝取であります、慈悲の働きであります、夫れを以て人の迷を遁れさせたいと云ふ所の親切があればこそ、一方には折伏なるものを吾々の宗旨では抑止と申します、同じ意味であります、何を抑へ止めるかと云へば種々の物を止めますが、道にあらざること、心をを用ゐる者はさう云ふことを致してはならぬと抑へ止める、其の本文を申しますと唯五逆と正法を誹謗する者を除くところ、さう云ふ者はいけないと云ふ風に間違つた心得は抑へて止めて仕舞ふ之がやはり普通の場合で云ふと折伏である、吾々の専門で申しますと抑止であり、五逆とは父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、和合の僧を破り、佛身より血を出す、云ふのであります、私共は何も刃物を以て父母の生命を取らうとすることは無いと思ひますが、無刀の大賊と云ふ言があります、眼に見ゆる所の刀を以て居ない大きな賊とある、夫れは

何であるか昔は今日の様に學問を樂に覺わることが出来ませなかつた夫
 れで父母の情を以て若い間に何でも早く自分一身の立つ様に勉強させた
 いと云ふので自分が充分出来なかつたから吾が最愛なる子なり孫なりに
 自分達は如何なる不自由をしても勉強さして遣りたいと云ふ斯う云ふ親
 切を踏み附けていや吾々の心得て居ることは今日の老人は知らない云
 ふ風になるのが心で以て自分の父なり母なりを殺すも同様親の恩を忘れ
 て仕舞ふ左様な御方は今晚御集りの御方にはありますまいが私共のこと
 を申しますのでいま考へて見ても随分汗が出ることであります誰でも一
 足飛びに下から二階に飛び上ることは出来ませぬ段々順序を踏むで行か
 なければならぬ夫れであるから眼に見ゆる刀を以て父母を殺すことはな
 いと逃げて身は之れ父母の遺體なり此の身體ぢや此の身體がなければ
 働くことは出来ない親があればこそ此の身體があるので如何なる身分の
 者でも忘れてはならぬ親を無刀で殺すと云ふ様な心得違の者があれば之
 を抑へ止めなければならぬと云ふのであります 阿羅漢を殺すと云ふの

は阿羅漢はアルハツトアルハ又と云ふ天竺の言葉であります支那では應
 供と譯する之は供養に應ずる人と云ふことでありますそれを殺すと云ふ
 ことも眼に見ゆた殺し方ばかりでないあの人は徳があるか知らぬが吾々
 の事は知らぬ杯と云ふ様に人から供養を受くべき人があつても自分が少
 し計り違ふことが分ると直に輕蔑するこれが阿羅漢を殺すと云ふのであ
 ります。和合僧を破ると云ふのは僧は天竺の言葉で僧伽實はサングハと
 云ふのであります和合と譯する今晚も皆さんが和合して居て下さるから
 話も出来る然るに彼方に行つては此方を悪く云ひ此方に來ては彼方を悪
 く云ふと即ち二枚舌を使ふて和合を破ると云ふのであります。佛身より
 血を出す佛の身體から血を出す今日活きた佛が有らませぬが佛身と云ふ
 ことがあります廣く言へば教であります其の話を聴きながらに詰らない
 と云ふ所から能く味つて見ないで誹謗して仕舞ふと云ふのが佛身より血
 を流すと云ふことになりす。人を批評すべき實力があれば宜いが充分
 聞かないで批評をするに當るか當らぬか分らぬそれが親切があればこそ

何處までも攝め受けて下さるのである、それで斯うして此處まで踏み出して御出の方にせめて一回でも私の様な行届かぬ者より御参考になること精神の修養になることの御話を致して廻つて欲しいと云ふことであります、到底私共では御満足と與へることは出来ませぬが、御希望に應じて参つたからは御話をしなければならぬ其所で攝受折伏の四字に就て御話をするので、攝受すべきは之を攝受し折伏すべきは之を折伏する、親切に世話の出来る者は何處までも世話をする、世話をするに就ては心の間違の方面丈を折つて降伏さして仕舞ふ、其の世話の出来る者計りならば是程結構なことは無いが、棄て置く心ころ／＼と轉じて行くか分らぬから踏み出しが大切であります。

攝受と折伏之を文武兩道に譬ふれば、攝受は文で折伏は武であります、今日も軍人方が多く御出になつて居るが、軍人の方は武の方で盡して下さる、他の御方は文の方で盡して下さる、併し文武兩道は何れもなくては御國を守ることが出来ぬと云ふことは申迄もない、慈悲は文の方として、文事ある

者は必ず武備ありて、二つ揃つて行かねばならぬと云ふことは今更申さずとも分つて居ります。文武の武の字即ち折伏、間違つた了簡のある者は何處までも其の間違つた心得を真直の道に引き戻してやる、武備を嚴重にしてあつたから、明治二十七八年の戦争も三十七八年の戦争も連戦連勝と云ふ結果を得られたのであります、武の字は支那では以前政と書いたので、戈を止める、夫れが武の字であります。戈を止めるのであります、鐵砲を打つと云へば打つ、打方止め！と云へば止める、今日さう云ふ號令がありますか、知りませぬが、吾々四十七年前の兵隊でありまして、デンデコ／＼と太鼓の音で足並揃へて居つた、打つと云へばドンとやる、打方止め！と云へば止める、武の字は打方止め！と云ふ字であります、刀を抜いたら何うかしなればならぬ、抜かないで治めなければならぬと云ふことを聞いて居つた、私共兵隊の時は洋劍はありませぬから長い日本刀を吊つてさうして鐵砲を擔いで居つた、其の御蔭で達者で今日まで生きて居るのであります、實戦には出會ひませぬが、若し出會つたら一發の下に死んで居つたかも知れ

ませぬ(笑聲起る)

夫れで武には七つの徳があると云ふ事を御話をしたいと思ふのであります。攝受折伏攝取抑止折伏と云ひ抑止と云ふのは吾々専門の言葉計りを繰返しますから御困りと思ひますが支那の地に來ましたから天竺まで御案内しませぬで支那の人が言つた言葉を出して見やうと思ひます。明治三十七八年の戦争の済む頃内地で話をしたことがあります。楚の莊王の云はれたことがあります。周の代八百年の末春秋の代に五霸とて大名頭が五人あつた。其の中の一の人が楚の莊王であります。其莊王が言はれた言に武には七つの徳があると云つて居る。夫れぢやから文武は離れぬ御互に分業であります。朝廷の思召は文武の二字を揃へて御國を治めて下さるから安心して居られる慈悲と智慧の二つが揃はなければならぬと云ふ所から武の方を謂つて見ませう。武には七つの徳があると云ふものは豫て御承知の通り御金で買ふことが出來ず腕力で奪ふことが出來ぬのが徳であります。其の

徳が七つ武に在ると云はれた。夫れは何であるか、
第一暴を禁ずる亂暴狼籍を禁止する亂暴狼籍しては相成らぬと口で言つても承知しない其の時ですな。武力を以て禁止する之が武の徳であります。智慧の働きます。夫れは御前が間違つて居ると云ふことを充分に感心させるのであります。
第二は兵を戦めるとあります。之れは所謂打方止めです。人が亂暴狼籍しなければ戦めて宜いでせう。
第三大を保つとある。大きなことを保證して行く。大日本帝國で御座るぞと云ふことを世界中に保證することが出来るのは武の徳ぢやと云ふのであります。言を換へて云へば智慧と云ふもので持つ所の徳。彼の人には大きい、大きいから他人の世話をする。世話をするから間違つた了簡の者ならば之を直さうとする。之で教と云ふものが残るのであります。小さい御方がある様でありますから後で分り易い御話でもして御互に慎まうぢやないかと云つて御別れしやうと思ひます。

第四は、功を定める何某が何う云ふ手柄をしたと云ふことを定める所謂功を論じ賞を行ふと云ふことになりす。

第五は、民を安んずる最も親い方で申してある武を以て暴を禁じ以て民を安んずる此れも武の徳でありませう。

第六は、衆を和らぐ世の中の多勢の者を和合さして仕舞ふ。

第七は、財を豊かにする。

只だ一通り説明をすると何の必要もない様な御感じがあるか知れませぬが、武に七つの徳があると云ふことを云はれたのが如何にも面白い第一、暴を禁ずる、第二、兵を戢める、第三、大を保つ、第四、功を定める、第五、民を安んずる、第六、衆を和らぐ、第七、財を豊かにする。

すつとこれは連絡して居ることでありす、夫れならば其様なことは御前達の専門の方に謂つてないかと若し御尋ね下さる御方があれば、謂つてない處か之と同じ處のものが三千年の昔に釋迦如來が無量壽經に御説きになつて居ります。夫れを列べて此の御話を了ることに致しませう。私共

兒童の時から棒讀で讀て居りますから御分りになりますまいと言つては失敬ですが、斯う云ふのです。

佛所遊履國邑丘聚靡不蒙化四字一句にして三句になつて居ります之を日本讀にしますと佛の遊び履む所は國も邑も丘も聚りも化を蒙むらすと云ふことなし即ち教が行き渡る所は皆感化を蒙ると云ふことになりす。

此れが第一の暴を禁ずるのである。次に「天下和順」とあるが第六の衆を和らぐである次に「日月清明」とあるが第三の大を保つのである次に「風雨以時災厲不起國豊」とあるが第七の財を豊にするのである次に「民安」とあるが第五の民を安んずるのである次に「兵戈無用」とあるが第二の兵を戢めるのである次に「崇徳興仁務修禮讓」とあるが第四の功を定めるのであります。

私共が親なり師匠から聞かされた事は佛の教でありますから其教が此處まで來ましたのであります。心此にあらざれば視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らずとは大學に申してある又多く聞くことありと雖も行はざる時は聞かざると等し、人の食を説かんに食はざれば飽か

ざるが如しと云ふ言が楞嚴經にあります、如何様に澤山に聞いても聞かぬよりは宜からうが聞いた計りで尤もと思つても實行しないなら聞かざるに等し、餘程やさしいのであります、知らないでやらぬのは罪が軽いが尤も知つてやらないのは罪が重い、だから尤も思つたら直に實行したら宜しい、やらうと思ふけれども夜だから明日からと云ふのは夫れはいけません、けれどもなしにしたいと思ひます。此處に一人の人があつて御馳走の演説をする、斯う云ふ物と斯う云ふ物を一つにすれば非常に旨い物が出来る、斯う云ふ御馳走の話を澤山聞いたからとて満腹にはならぬ、多く聞いたからとて實行せざれば聞かざるに等し、實行しなければいけません。今まで申したことは一向要領を得ぬと云ふ様に御感じになりませうが、一人一人で聽かねばならぬと云ふことに就て丁度昨年でした。先帝様が御病氣に罹らせられませぬ時、明治四十五年七月二日私は東京から夜通しの汽車に乗て翌日の朝山形市に著きました、すると山形に居る處の堤鳳麟と云ふ人が待ち設けて居つた、其處で私共は二人一緒になつて、山形福島巖手

の三縣を廻つて七月十五日東京に歸つたことがあります、其の二週間毎日私の前に出た堤君から始終同じ事を聽きました、が何度聽いても感心したから夫れを申すのであります、夫れは新潟縣の新瀉市に生れた人で、木村暉一と云ふ人があります、此の人が一昨明治四十四年三月新潟縣の師範學校を優等で卒業した、餘程の勉強家であると云ふことです、夫れで四月から新瀉市に在ります、幾つかの小學校の中で豊照小學校と云ふ學校の教員となつて、其の小學校の尋常四年の生徒の四十人一組と云ふものを受持つた、處が揃も揃つて活潑の子供と云つたら宜いが腕白小僧の仕様のない小僧計りが揃つて居つた、其の中の一は誰も眞の名を呼ぶ者がなく、唯惡太郎と云ふ者よりない、そこで餘の三十九人も皆惡太郎になりさうだ、困つたものだと云つて居つた、其様な事とは知らずに暉一君は受持つとなつて頻りに心配して居る、ところが其の先生の親切と云ふものが段々生徒の方に知れて來たものど見られました、尤も初めの二十日間ばかりは種々と誠めて見ましたが一向聽き容れない、兒童を教へるには自分が忍耐して行かねばなら

ぬと云ふことは知つて居るけれども、此様に言つて聞かしても聽いて呉れぬ、到底私は小學校の教員と云ふ資格はないと思つて、もう辭さうかと思つて居ると一日心機一轉した。師範學校の生徒時代から眞面目に精神修養、自分の心を練ると云ふことに熱心で、宗教の講話を眞面目に聽いて居つた、遠慮なしに云へば私共の宗旨の講話を聽いて居つたさうであり、ます、夫れで心機一轉した、之は私が間違つて居た教員になつたと思つたのが自分の自惚魂性だ、私の役目は此の小學校の教員となつたに相違ないが、何も先生であるから何も彼も生徒に物を教へるので、生徒の方から此方は何も教を受けることはないと思つたのが間違ひだと心を變へた之が人間心の持ち方と思ひます。子供と云ふものは無邪氣の者だ、今何か諍つて居ると思ふと直に仲好になつて勉強して居る、彼點を學ばねばならぬと思つたから、極く柔順に親切に教へて居る、さうなつて來ると先生が無暗に生徒を叱責せず親切に教へるから、悪太郎の外は夫れ程に悪くなかつたから、其の次の年になりますると四十人の生徒の中で申合はした、先生は唯だ一

人ぢや、吾々此の組に居る者は四十人である、其四十人が先生一人を心配させるのは御氣の毒だと思つて、七人の生徒を總代と定め、さうして規約を拵へた、夫れは四十人の中で一人でも心得違の者があれば、先生から御叱り下さる前に吾々朋友の好誼でさう云ふ事をしてはいかぬ。天子様の御蔭で吾々學校で道理が覺わられる、親切に教へて呉れる御師匠様があればこそ覺わられるのであるから、先生に心配を掛けない様にせよと云ふことを勸告することを約した、併し乍ら悪太郎なか／＼温順にならぬ、七人の總代が申合はした、三度までは君の御恩親の御恩師匠の御恩を説き聞かせ、さうして尙ほ温順にならねば仕方がないから寄つて集つて充分に苛めて遣らうと云ふことを定めたけれども、夫れが善い事であるか、悪い事であるか子供達の事であるから定め兼ねた、之は先生に一應伺はなければ定められぬと云ふことになつて、先生の前へ七人の總代が出て來まして、私共自治制で以て七人の總代を定めまして、仲間の中に心得違の者があれば三度までは親切に言つて聞かし、若し聽かなければ四度目には苛める事に定めましたが如何

でせうとやつた、其の時に先生が成る程夫れは面白いことを定めた、ところが御前達生徒計りでない、先生も時として随分間違があるから乃公も其の仲間に入れて置いて、若し間違つたことがあつたら言つて呉れ、何うしても乃公が聴かなければ寄つて集つて苛めて呉れ、と言つたから之は面白いとなつた、苛める事丈けは善くない事と咎められるかと思つたのが、其の仲間に入れよとなつたから喜んで生徒を入れて上げませうと許す様になつて、堅く守つて居つた處が例の悪太郎です、三度までも親切に言つて聴かしても承知しない、其處で總代は先生も仲間ぢやから悪太郎を苛める時には先生にも来て貰つて、彼の拳骨でやつて貰つたら面白いと云ふので、先生の前に來まして、先生彼の悪太郎です、三度も言ひ聞かしましたが何うしても聴き容れませぬ、規則を破りましたから苛めることにしましたから來て下さいと言つた處が先生如何にも悲しい顔色をして困つたものぢや、兎も角其の子を教場の乃公が毎時話をする處へ連れて來て立たせて、さうして皆の者も御集りと云つて出掛けた、扱て此方の三十九人は悪太郎を教場の前に

立たせて、皆の生徒も其處に列んだ、其處へ先生がやつて來て、三十九人の生徒に向つて、扱て皆さんさう云ふことが出來ない様にと心配して居つたが、私が行届かぬ爲に斯う云ふ者が出來た、御前達が親切に言ひ聞かしても聴かぬと云ふ事である、之は乃公の不調法だ、此の子の親から預つて居る私が其の親に對しても濟まぬ、天子様に對しても相濟まぬ、又校長さんに對しても濟まぬ、私の不行届から起つた事であるから、此の子を苛める前に先づ乃公を苛めて呉れと眞面目になつてやり出した、さうなると妙なものです、七人の總代がはらくと涙を溢して、先生に何も不行届はありませぬ、私共七人が總代顔をして三度まで此の子に對して、天子様の御恩親や師匠の御恩を申聞かしましたけれども聴き容れませぬ、之は皆私共七人の親切が足らなかつたのであります、決して先生が悪いのではなく、ありませぬと斯うなつた、さうすると残りの三十二人の生徒がいや七人の總代は親切に言つたのです、私共が七人の總代に委し過ぎたので悪太郎が増長したので、皆な私共朋友の好誼で親切に申聞かしたら此様に先生に御心配を掛けるので

はなかつたのです、皆な私共が悪いのであります。生徒悉く罪を被つて来たさうなると悪太郎もう堪らなくなつたと見て、ワツと云ふなり其處に打ち倒れて仕舞つたさうして泣きながら先生が御悪いのでもない、七人の總代が悪いのでもない、他の生徒も悪いのではありません。せぬ、悉く親切です、人が何と言ひ聞かしても聽かなかつた、私一人が悪いのです、其の時から生れ變つた様になつて、其の後は悪太郎と云ふ者は無くなつて善太郎々々々と云ふ様になつた、如何です、之れが一人々々が御對手と云ふのであります。一人々々斯道を踏み外すまいと云ふ心に信する教がある、コロコロと轉り易い心であります、が外の道へ進まぬことになる、何うか人間の踏むべき道、即ち誠の道を踏み外さぬ様に御互に氣を附けたいと思ふのであります、誠さへ守つて行くことが出来れば、夫れが即ち神様佛様と崇められますのであります、から誠を守れと云ふ事は、先帝陛下の御詔勅にも在ります通り、誠を守つてこそ活甲斐のあることで、又夫れが天子様に對する忠義ともなりますのであります、ですから大日本帝國の臣民であると云ふ

このことを須臾も忘れてはならぬと思ひまして、是れ丈の御話をしたのであります。

道は説く人はあれども之を知る人は鮮し、之を知る人は之あり、之を行ふ人は鮮し、説くことを得ずとも、之を知るは説くに勝れり、之を知ることを得ざれども、先づ之を行ふは之を知るに勝れり。

(澤庵和尚)

十波羅蜜多

(十一月十九日奉天に於て)

十波羅蜜多 (到彼岸) (度)

檀那	尸羅	羼提	毗梨耶	禪那	般若	鄒波耶	波羅尼	婆羅	若那
布施	持戒	忍辱	精進	靜慮	智慧	方便	願	力	智
慈善	修身	忍耐	勉強	沈思	明辨	方法	希望	實力	覺悟

智識—智育

道德—德育

十波羅蜜多此處に書出しました通り十箇條あります、この波羅蜜多は、天竺の言葉の音を支那の文字で寫したので、六波羅とか十波羅とか申して居りますのは、下略でありまして蜜多と云ふことを儉約してあるのであります。京都の六波羅と云ふ處に清盛が邸宅を設けたとか、鎌倉時代に六波羅の南と北に役所があつたとか、畢竟略したのであります。此處に書出した梵字を皆さんに讀むで下さいと云ふのは無理であります。初めの二字は十の梵語でダシヤと申します。私が英吉利に参りました時は、毫も此様な事は分らなかつた。明治十二年から十七年迄さう云ふ事を専門にやつて來ましたから、今日忘れて居りはしないかと試験をしたのであります。何うやら忘れぬ様で及第が出来さうであります。(笑聲起る)一から十まではエーカドヴィトウリ、チャトウル、パンチャン、シャツシユ、サブタン、アシタン、ナワン、ダシヤンである次にパールミターと云ふ語を波羅蜜多と音譯したのであります。次に括弧の中の文字は語の意義を支那の人に分る様に書いた義譯なので、十到彼岸とも十度とも謂つて宜い、彼の岸に到る目的の地に達すると

云ふことでもありますから能く分るでせう私が此處に立つて居る此のテ
 ブルを一つの河なり海なりに譬へます私は此方の岸に居る皆さんは向ふ
 岸に御座る此岸に立つて居つて向岸に御居での御方と出會ふには此岸か
 ら彼岸に到らなければならぬ夫れをテールを倒して行てはいかぬ行く
 には法があります夫れであるからして此の岸から彼の岸に行くには橋が
 あれば其の橋を渡るとか船があれば船に乗つて行くとか其の道を踏むで
 行かなければならぬ一足飛びに行く事は出来ぬと云ふことであります
 彼の岸に到ると云ふのは直譯で彼岸に到つた心地と云ふことで渡ると同
 じ意味で十の向ふの岸に渡るに就ての心の場合と御承知下されば宜い
 其の始めの六つ丈けを擧げる時があります夫れが六波羅蜜多である。此
 處で鳥渡云はねばならぬのは此方の岸と譬へたのは心の迷彼岸とは心の
 悟であります。丁度今晚此の學校で御話をすると云ふ御約束をして出て
 來ましたのであります皆さんも聽いてやらうと云ふ親切な御心から此
 處に斯く多數の御方が御集りになつたのであります若し御宅を出らる

る時に左に行くべきを右に行かれたら此處に御出でになることが出来ま
 せぬ眼に見ゆる身體で眼に見ゆる此の學校に來る道を踏み違へることが
 ありますさうなると目的の處に遠くなる眼に見ぬ心の道は尙更です心
 の踏むべき道を善と惡と別けると善の方に向つて參れば一足宛高い處に
 上つて行く様で世の中がからつと分る惡の方に參りますると一足々々地
 中にでも這入り込む様で何事も分らぬ様になつて來る。迷と悟とを此岸
 と彼岸とに譬へたのであります。誰が言ひ出したかといへば三千年の昔
 印度に於て釋迦牟尼如來が説き出されたのであります。釋迦牟尼とは釋
 迦族中の優れた人と云ふことであります支那では孔子名は丘字は仲尼と
 云つた人が豪かつたから孔子の下に聖を附けて孔聖としてありますシヤ
 ーキヤムニ之を釋聖とも云へます即ち御釋迦様と云ふのであります此の
 御方が如何なる者に向つて此様な話をせられたかと云ふと菩薩に向つて
 言はれたのであります何だ吾々に向つて説かれたのかと思つたら菩薩に
 話されたのか夫れぢや吾々は傍聽者ぢやと直に逃支度をせられてはいけ

ませぬ、今晚澤山御出でになつたが皆な菩薩であります、漏てるのではありませぬ、(笑聲起る)菩薩とは皆さんの心です、互に心と心が御交りをするので皆さんの心が即ち菩薩であります。菩薩とは菩提薩埵の略にして其の音はポードヒ、サツトヴと云ふのが真箇であります。義譯すれば覺有情となる、今夜一時間南條文雄何を話すか聴いて遣うと云ふ心で御出になつて居るのでありませう、即ち親切がある其の親切なる心が菩薩であります、中には後で悪口を言ふと云ふ様な菩薩も出て来る、(笑聲起る)兎も角人の話を聴いて遣らうと云ふ皆さんが誠を以て御出で下されたので私が只だ一人此の場合には御話をすると云ふ役目、御聴き下さるのが皆さんの役目、各々役目大切ぢや、(笑聲起る)さて三千年の昔釋迦牟尼如來の話を開分けやうと云ふ方には先づ此の十箇條を實行せよと云ふ事を話された、此れは三千年の昔に限つたことではない、此の大正二年十一月十九日此處に生活して居る者も此の十箇條が心の踏むべき道と分つたならば是程喜ばしいことはいと私は存じて居ります、迷へば損をする悟れば得をする。

横に並べた三行の第一行は梵語の音譯である、其の第一たる檀那の音はダナである、それを字の如く呼んで檀那と云ふときは日本語となりてをります、兎も角も第一行は支那の字で天竺の語の音を寫したものであります、が意味を取つて貰へば宜い、それで第二行は古い翻譯である、又第三行は私が假りに配當したので、慈善修身忍耐勉強沈思是れ丈けが道徳の箇條と見た、今日の徳育です。徳は金で買ふことも出来ませぬ、腕力で奪ふことも出来ませぬ、是れで五箇條は済みました、併し人は温順な計りで賢いことがなければ全くの人間と云ふことが出来ませぬ、後の五箇條があるので、す、明辨……明かに物を辨へる、即ち智慧であります、方法……之を古來方便と云ふのであります、此の方便と云ふ語を偽りのことに遣はれて居ります、のが残念であります、から今晚申しますが、方便方法手段は成る丈け善き方を取つて行かなければならぬ、希望……人には希望がなければならぬ、夫れがないと何事も出来ませぬ、夫れには實力が必要であります、力が無いの有りさうに見せかけるのではいかぬ、夫から覺悟……覺悟と云ふ物がなけ

ればならぬ之が智識です之が今日の智育であります智育計りで徳育がなければ悪い者が出来て来る徳育計りで智育がなくては何事も成らぬと云ふ様になります其の點を餘程噛み別けてあるのであります之で大體分つたでせう。

第一の檀那ダーナとは布施と云ふことであります布施と云ふと金錢などを紙に包むで人に遣ること計りと思ひますから可笑くなりますさう云ふ譯のものではない布施と云ふことは今日の言葉で云へば慈善であります何であらうと他人の世話に預からぬ丈けでも幸福ですが其の上如何な場合にも他人を世話する方に向つたら是程有り難いことはない何の因果で知らぬ人を世話をしなければならぬと云ふ様な心があるからいけませんの日本では物を下さる様な御方を檀那と云ひますが梵語で詳しく云へば布施の出来る人を呼ぶには檀那の下に波底と云ふ語を書き添へます即ち施主と譯します金錢物品計りでない自分の心の踏むべき道を取違へぬ様に人の法則手本となることを施すも布施であります自分の財産の中を

何分の一なりとも人に遣ると云ふことは慈善心がなければ出来ませす氣の附いた事でも誠心を以て御話することが出来ぬ此の十波羅蜜多を詳細に御話すると二つなり三つに別けてあります夫れを一々申しはしませぬが處に依つて申上げて見ませう布施には財施と法施と云ふことがあります財の施しと法の施しと云ふことになりませんが子供の時分に親から能く云はれました何事でも始終氣を付けて居つたなら世の中のこと見るに附け聞くに就け教科書の様になるぞ出来上つた書物計りではないと云ふことを常に云はれて居りましたそれで私が兒童の時でした彼岸であつたか盆であつたか私共の宗旨ではありませぬが他の宗旨の人が鐵鉢を持つて歩かれる米一掴錢一錢でも投げ込むと其時唱へる言葉があります夫れが私の耳に聞けた何事でも氣を附けたら教科書の様になるぞと云はれて居りましたから夫れを手帳に書留め様と思つたから念を入れて聴いて居つたサイホウニセクドクムリヨウダンバラミツグクエンマンナイシホツカイビヨウドウリヤクと聞けた其處でサイホウと云ふのは佛は西

方淨土に在りと聞いて居るから西の方と書いたら宜い、屹度さうぢやと定
め込むだ處がさうではなかつたニセクドク假令一錢が五厘でも施物が少
いからと云つても賈の功德ではない、眞箇の功德と思つてやりたいと思つ
た(笑聲起る)サイホウは西方として、極樂へ行きたいと思つて、米なり錢なり
やつたのでありませうが少いから賈功德では驚いた、知らぬ事は宅に歸つ
て聞こうと考へた、ムリヨウダンバラミツクエンマン猶ほ驚いた佛の
前に鶴龜の蠟燭立と香爐と華瓶とがあります之を三つ具足と申します、夫
れで此の和尚賈功德と云ふかと思へば三具足エンマン杯と吟味して居る
など思つた、ナイシホツカイビヨウドウリヤク、尙ほ分らぬから早速歸つて
聞くべしと云ふので歸つて來て只今歸りました、只今斯様々々でありまし
た、サイホウと云ふから西の方でせうと云つたらいやさうではない、想像字
を書いてはいかぬ、彼れには深い意味がある、其様な字ではない、兎も角萬事
氣を附けるが宜い、いま書いて見せて遣ると云ふので、眞箇は四字一句で六
句であると云つて書いて貰つたのが、財法二施功德無量、檀波羅蜜、具足圓滿、

乃至法界平等利益、である即ち慈善と云ふことを唯御前と私と二人でやる
のではない、之は世の中の人に皆やらせたいと云ふ希望を述べることであ
るから、能く味はつて居れと云ふことでありました、之は亡父の御蔭と思つ
て今日尙ほ大に感謝して居ります、そこで慈善の事業を勧めなければなら
ぬ。

第二戸羅シラ持戒、此れは五戒とか十善戒とか夫を守つて行く之が修身
であります、人の顔の墨計りを見て自分にないと思つたら間違であります、
修身と云ふものは誰でも自分の身の上を修めて行かなければならぬ。
第三の屣提、クシャーンテイ忍辱である、此の音譯第一字はよほど混雜した
字でありますが、この屣センと云ふ字で天竺のクシャーンと云ふ音を寫し
ましたので、耻辱を忍ぶと云ふことであります。皆さんの中にさう云ふ御
方はありますまいが、私に赤面させやうと思つて何か私に向つて言はれて
も、私が恥を搔されたと思はなければ仕方がありません。喧嘩を賣掛け
ても、此方が買はなければ立腐れになつて仕舞ふ、夫れが忍耐であります、之

は精神修養の箇條として、平素常に味はつて御貫ひ申したのであります。如何なる身分の御方でも、忍耐……堪忍と云ふことがなくては暫くも活きて居ることは出来ませぬ。現世を娑婆と申します、皆さんは御用になりませぬ、此れはサハ一と云ふ梵語の音譯の文字で、義譯は堪忍と云ふこととであります、御互に堪忍して居るから此の娑婆……此の世の中に活きて居られるのであります、堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍と云ふ歌があります、徳川家康公が二代將軍秀忠公の御臺所に贈られし文章の引證ありしが、略す少しく忍びざれば大謀を破ると論語にも云つてあります。第四の毗梨那ヴィールヤ、之は精進と云ふこととあります、ところが精進と云ふと食物のことに日本では使つて居りますが、抑も末の話であります、精進と云ふことは精神を定めて先方に進んで行くのであります、即ち勉強である、勉強を忘れてはならぬと云ふことを精進と云ふ字で譯したのであります、精神一到何事か成らざらんであります。

第五の禪那、ドフヤーナ、禪定とも靜慮とも譯します、去年は釋宗演禪師が彼

方、此方廻つて講話をされたが、其の宗旨で云ふ禪は禪那であります、梵漢並べ擧げて禪定と云ひ心を定むるの義であります、全く義譯すれば靜慮で、靜かに慮らねばならぬ、私は御話する爲めに斯うして立つて居る、身體は立つて居つても心は靜かに皆さんの様に座して居る様でなければ御話は出来ぬと云ふことになり、今日の言葉で云ひますれば沈思であり、心が浮々して居つては何にも良い思案は出ませぬ、沈靜、落著いて靜かに物を考へて行く、禪宗は不立文字と云つて、書いた物を見ず、教をすると云ふこととあります、其の點です、十波羅蜜多の初め半分丈けが濟みました、此れは道徳の箇條、今日の教育で云へば徳育の箇條であります、慈善も心にかけて忘れてはならぬ、修身も身の勤めなれば忘れてはならぬ、忍耐、勉強も忘れてはならぬ、物事を考へるには落著いて考へなければならぬ、成程と道理を自得する上は、夫れを實行して行かねばならぬ、是れ丈けが温順なる箇條です、即ち子供らしくないと云ふことであります、前の五箇條は温順しくなれと云ふ箇條であります、併し温順しい計りで物の善悪を識別する事が出

来ない何うも間違つた事が起らぬとも限らぬ馬鹿な目を見る此の馬鹿
 ですな之は秦の始皇の次の二世皇帝の時に趙高と云ふ人が如何程乃公の
 威權が振へるか云ふことを試す爲めに馬を指して鹿と云つた趙高の云
 ふことを真箇だと云ふ者は味方となしさうでない馬じやと云ふ者は後か
 ら手を廻して罰した夫れで馬鹿と云ふことになつて居る様であります馬
 は音がバでありませう其様ならば鹿を音でロクと云ひさうなものです二
 字共音で云ふとパロクになる彼處にパロクが来たでは分らぬ笑聲起る其
 様ならばマカでも分らぬ上の字はバと音で云ひ下の字をロクと云はぬで
 カと云ふ之を重箱讀と云ひます夫れで私は馬鹿と云ふことは斯う云ふこ
 とから轉じて来たと思ふのであります即ち慕何此れは梵語のモ一ハの音
 譯にして其の義譯は愚癡でありますさてホカとは音が最も近い昔支那で
 は慕をモ一と讀むで居つたと見ゆる又日本のハヒフへホは唇の音であり
 ますけれども日本を離れて支那印度西洋諸國では皆な咽喉から出るから
 カキクケコと聞ゆる妙なことを言ひ出したと御思になりませうがハヒフ

へホを咽喉から出さうと思ふとなか／＼困難であります兎も角ホカが轉
 じてパカ之で其の起原と云ふことが明かであります近頃日本の或る新聞
 でもパカと云ふ字を莫訶と記されてある之は附けたりの御話をしたので
 あります

前五箇條は今迄申しました通り如何にも温順しくなる箇條だけれども温
 順しい計りで賢くないと一つの問題が出ます賛成の御方は手を舉げて下
 さいと云ふ擧手する賛成だと思ふ念の爲めに不賛成の御方は手を舉げ
 て下さいと云ふ初め賛成の方に手を舉げた人が復た不賛成の方に手を舉
 げるとなる如何です貴方は初めに手を舉げ復た後にも手を舉げるとは
 何う云ふ譯ですと尋ねると初めに皆さんが手を舉げたから私も舉げた然
 るに後にも手を舉げた人があるから私も手を舉げたと云ふたら之では温
 順しいに違ひないが一向主義がない夫れが賢くないのである迷を離れ
 て悟を開くと云ふことに就ては温順しく誠の道を踏むで行かなければな
 らぬが夫れを間違へて踏むで行つたら大變だから後の五箇條があるので

夫れで第六般若プラチユニヤ即ち智慧であります、明辨とは前にも申しました私はさう譯して居ります、進知とも譯されませう、温順い上に之をやつて行かなければならぬ。

第七那波耶ウパーヤ即ち方便である、方便を嘘のこの様に云ふものがあるは間違ひである、過日貴方が申されたのは眞箇と思つたら跡方もないではないか、夫れは方便を言つたのだ、杯と云ふのは怪しからぬことであり、ます、方便の二字は正直を方と云ひ己れを外にするを便と云ふとありて、正直に人に代るが方便である、吾人に代つて用を辨じて下さる方法が郵便である、だから之を信じてポストに入れたら宜い、己れを外にし人に代つて用が辨じて行くやうに近附いて行くこと云ふ意味であります、方法手段なら何でも宜しいと云ふことはありませぬ、所謂誠と云ふ是程確かなものはありませぬ、誠を以て方法手段とすると云ふことであります、其の次が波羅尼陀那ブランドハーナ、是れを願と譯する、希望であります、何

事も希望を以て掛らなければならぬ。

そこで次は婆羅バラ即ち力である、これも力がありさうに見せるのではない、かぬから、實力確乎と腹の底から力を入れて行く、遣り掛けたら自得せぬで、は置かぬと云ふ覺悟を持つてやらなければならぬ。

一番終りのは若那チユニヤーナ之も智であります、此方は覺悟即ち智識である、今迄知らなかつたことを能く承知する識であります、併し又智育計りで徳育がないと何うなる、弘法大師の著書にも日蓮上人の御書にも「孝經を以て親の頭を打つ如し」とあります、孝經と云ふ書物を以て自分の親の頭を打つと云ふ譬へである、親が自分の愛する子供を學校に上げたり人を頼むで呉れるから忠孝の二字も讀める様に教へて貰ふ、自分を學校に出して呉れる親があればこそ親の知らぬ字が讀めたり書けたりすることが出来るのである、されば親の御恩師匠の御恩を忘れねば宜いが、宅の親父は字を知らぬとか、能く書かぬとか、老人を苦める者があります、夫れが即ち孝經を以て親の頭を打つのであります、無刀の大賊と云ふことがあつて、年老つた御

方が親切に言つて聞かしても入らざる御世話だと云ふのが即ち眼に見ぬ刀を以て親を殺すと同じである。

以上御話した如くであるから兩方共になければならぬ温順しい上に賢い、賢い上に温順しい、智育徳育が權衡を保つて進まなければならぬと云ふので十箇條の箇條を立てられて之を守つて行けよと説かれたのであります。二拳五指の話あり之が即ち精神を修養して行くのであらうと思ひます。孔子の弟子の公西華も之を能くすと云ふにあらす願はくは之を學ばんと云ふことを言つて居りますが私が出来るにはよう言ひませぬが何うか真似でも善いことをしたいと思ひます、真似ることは學ぶことです。

之に就て一つの御話があります昔し大和の郡山の太守が初めての御國入と云ふことになつた其處で郡山の領分の者が太守が初めて國へ御歸りになると云ふので拜みに出ると云ふことになつた處が一人の若者に老人の母がありて腰が抜けて居るが初めての御國入と云ふので母親にも拜せたいと云ふ孝心から、母親が私は腰も立たぬから御前拜んで来てさうして話

をして呉れよば宜いと云ふに關はらず、孝心の餘り辭退するのを無理に老母を背負つて、澤山御迎に出て居る人中にやつて来た誰人も能く御顔を拜みたいと云ふ處から、御互に押合ふ、其の中にも孝子の若者は前の方へと出て来た、背後からづん／＼押して来る、愈々眼前を太守が御通りになると云ふ時にそりや御見ねになつたと云ふので、ワア／＼と押して来た爲めに自分一人なら押戻すことも出来ませうが、母を負ふて居る爲めに力が入らなかつたから、どつと押された拍子に太守の御輿に打突かつた無禮者と云ふので縛つて牢に投げ込むだ、貴様は何う云ふ心得で太守の御輿に打突かつた何と云ふ心得であるかと責め問はれるから、母親が實は此の通り私は腰が立ちませぬので、忤が背負つて来て呉れましたが私を保護する爲めに、足許が踏躓いて御輿に當りましたので、如何様に忤が申しましたも私が辭退して忤に負はれて参りませなんだら此様な無禮なことは忤は致しませぬ、私が息子の云ふに任かせて参りました爲めに斯う云ふ御無禮を仕りましたので、何うか私を罰して下さい、私はもう餘命もありませぬから如何様に

も御處分下さい私が居りませぬければ此様な不調法も致しませぬか
 らと涙を流して言つて居る、すると息子がいやさうではありませぬ、辭退せ
 られたのを無理に私が他人から孝行息子と云はれるのが嬉しさに、負ふて
 行きましたので、若し負ふて行かなかつたら、私一人が拜みに参りましたと
 言はれては大變と思ひましたから、無理無體に背かに縛り附けて出て來ま
 したので、母には罪は御座いませぬ、私の不調法でありませぬから、私は如何な
 る刑に處せられても差支ありません、と言つたので、役人も何とも仕方な
 い、其處で恐るゝ此の事を太守に伺つた、すると太守が何にも罰すること
 はない、予が初めて國に來たと云ふので、出迎に母を連れて來て押されて打
 突かつたのである、親は子を庇ひ、子は母を庇ふ、誠に孝心の現はれたもので
 ある、感心な事ぢや、罰する處か、何日の間牢に入れたか知らぬが、氣の毒であ
 る、青錢一貫文か十貫文か褒美を遣はし、猶ほ此の上孝行せよと申附けいと
 云ふことであつて、母子俱に嬉し涙で下りました、さあ此の事が評判になつ
 て、今度の太守は御年齢は御若い、が豪い御方であると云ふので、領分の者は

非常に喜んだ、夫れから一年経ちまして、江戸に御出でにならなければなら
 ぬ、愈々何月何日、太守が江戸に御發足になると云ふ事になりました、さうな
 ると皆な慾張つて來て、老父母のない者まで隣の婆さんの處に來て、扱て御
 婆さん七分か五分か暫らくの間窮屈であらうが、私に負はれて下さい、夫れ
 は全體何の爲めですか、御前さんは知らないが、去年太守が初めて御歸りの
 時に某と云ふ者が斯うゝ云ふ譯で褒美を貰つたから、私は獨身者である
 から、御前さんを私の母親として行くのだと云ふ風、に、何れも慾張つて幾組
 ともなくやつて來た、さて大變だ、御輿が門から外に出ませぬから、後戻りと
 云ふことになつた、夫れから門前に居る者を一々縛つて、調べて見ますと
 此の者は私の子ではありませぬ、何か旨いことがあるからと云つて、私を無
 理に背負つて参りましたのです、いやさうではありませぬ、此の婆さんが負
 ふて行つて呉れと頼みますから、負ふて來ましたのですと云ふ様に、互に争
 つて居る、其處で嚴重に處罰をしなければならぬが、兎に角、太守に伺はなけ
 ればならぬと云ふので、伺つた、夫れは芽出度い事ぢや、罰することはない、眞

似ても善い事を真似るのは爲さざるより優る、青鏡を遣つて真似ではいかぬ真箇にやれと云ふことを申附けよと云ふことであつた、皆々重き刑に處せらるゝと思つて居つたのが褒美を貰つたので、眞の孝行者が澤山出来たと云ふことであります、此の御話は何かに出て居ると云ふことを聞きまして、様でありますが善いと云ふ事に氣が附いたら真似でもしたいと云ふ處から不圖想ひ出したのであります。

一向條理の合はぬ様な事を申しましたが一言一句たりとも皆さんの精神修養と云ふ上に於て御参考ともなる事がありましたならば最も幸福に存する譯であります。今晚は之で御別れを致すこととします。

倒るゝ毎に起つ人は、竟に倒れざる人となるべし。

(モーリス)

こごももの鏡

(十一月二十七日 關東都督官邸に於て)

今晚は皆さんに向つて(小冊子を示し)此のこごももの鏡と云ふ斯う云ふ本であります、皆さんの中には既に御讀みになつた御方もありますが、此の書を読みまして夫れに私の考を附け添へたいと思ふのであります。

此の書は昨年の八月私の承知して居る井上賢順と云ふ人が書きました物で、三冊丈け昨年の八月二十五日私の宅に送つて呉れました、こごももの鏡とあるから、大人でない者に讀ませたいと云ふ積りで書いたものであります、併し私自身が一度讀みまして之は何うしても子供計りでない、大人も讀むべきものである、さうして之を理解して 先帝陛下の思召の深く在らせられた事を常に忘れてはならぬと云ふ感じを起しましたのであります、夫れで先月二十七日大連から旅順に參つて福島都督の官邸に於て福島さんの奥様首め旅順で重立つた各位の奥様方の御集りになつた處で一度之を讀み

まして、同時に自分の感じた事があれば付け加へて御話をして来た計りで、他では何處でも御話を致しませなんだから今夜皆さんと俱に讀む心得であります。

此のこどもの鏡の下に 先帝御製拜誦記と書いてあります。先帝陛下の御作り遊ばした御歌が非常に數多くあると云ふことは新聞で御承知でありませう、御製の御歌を拜見なされて御座つた御歌所長男爵高崎正風さんと云ふ御方がありました此の御方は 先帝様に先き立つて没くなられましたが彼の御方から洩れたと云ふ噂がありましたましたが、果して何うでありますか兎も角澤山な御歌があるのであります。

夫れで之から讀みまする御歌は悉く皆さんが此の本で御讀みにならなくとも、他の新聞なり雑誌で御讀みになつて御承知でありませうが、餘りの有難さに記してこどもの鏡としたと云ふことが書いてあります。此の人は私が能く存じて居ります、福岡縣の人で、先年久しく東京に居りましたが、つと町を離れた巢鴨の田舎の方に住つて居つた、其處に私が關係した學校

がありました、中外日報と云ふ京都で發行して居ります佛教専門の新聞の記者でありまして、東京の方を受持つて居つた人でありました。何う云ふ譯か其の人が昨年、福岡縣に歸つて居りました、今では縣立の中学校の先生になつて居りますが、此の書は實物を示し、第二版であります、私が頼まれて書いた序文が此處に出て居ります、初版の時は、丁度此の人が男の兄弟が四人あつたものと見えます、私と同様である處が愛して居つた舍弟が何う云ふ譯か亡くなつたので、愛弟法道の初盆を記念の爲めに此の書を發行すと云ふ様な序文でありました、死んだ舍弟と云ふのが非常に子供が好きであります、舍弟が子供好きであつたから、子供さんに讀むで貰はうと云ふ所から、こどもの鏡としたのであります。其の出版費用と云ふのは兩親と二人の兄とより出して貰つた、大正元年八月二十日賢順記とありました、讀むで見ました處が如何にも感心しましたので、男の子に一冊、女の子に一冊渡しまして、残の一冊を私が大概懷中に納れて居りました、夫れで出版した残餘があれば貰ひたいと云つて遣つたら、七百部出版した所が、彼方にも五

部此方にも三部と云ふ様に知人や學校に贈つて殘餘が五百部あつたが、備後の國の小學校から學校生徒に一冊宛讀ませたいから五百部あれば送つて呉れと云つて來たので有難いと云ふので其の學校に送つて仕舞つた併し乍ら探して是れ程あつたから送ると云ふことで少し計り送つて呉れました。其處で私は勸めてやつた再版の費用は幾分か御補助するから御出しなさいと云つてやつたら、夫れでは何か私に序文を書けと云ふことで書きました併しこどもの鏡であるから子供にも分る様に書いて呉れとの注文でありましたが、年の少い者ばかりが子供でないと思つたから此の書に在ります通り、

天子様から御覽なされまするとこの御國の臣民たる私どもを、老人も少年も皆子の如く思召し下されまます、それで私は此のこどもの鏡を、少年の人はりでなしに、老人も讀むで、皆々の心の垢の有る無しを見て、毎日顔を洗ふやうに心を洗ひ上げ、誠の道をふみはづさぬやうに致し度いものご存じます。一言のべて本書の序文に代へまます。

大正元年九月二十六日

南條文雄

と書いて出しました心にも墨が附かぬやう曲らぬやうにと云ふ處の鏡であります。賢順君自身では年の少ない子供に限つたが、君は民の父母と云ふことがあります、御齡は若くて在らせられても御身分は大日本帝國の天皇陛下で在らせられますれば如何なる者でも臣民は吾子の如く思召す、其の臣民の中の幸ひに一人として思召下されて、今上陛下が親御様の御思召の通りに立たせられて御保護下されますから、此の遠い處までも皆さんが御出ましになつても、吾々は日本帝國の臣民である、口には御出しにならぬでも心の中に、すつと座りがあるのであります。

先づ最初に鏡と云ふ題の御歌で

打むかふ度に心をみがけとや

(先帝御製)

かどみは神の造り初めけむ
とあります鏡に向ふ度に心を磨けと云ふ思召と見えます、御承知の通り、我が朝廷に三種の神器の中に鏡があります、天照皇太神宮が御孫瓊杵尊の

天降らせ給ふ時に、神鏡を御渡しになりまして、之を見ること尙ほ吾を見るが如くせよと仰せられましたのであります。

扱て之から御製の御歌を一首づつ拜誦させよう、一々其の前に明治天皇御製と書いてあります、其の數二十四、一首づつ記しては其の後に子供でも分る様に解いてあります、なかく骨が折つてあります、私は最初に讀むで感じました、能く書いてある、流石新聞記者ぢやと思つた、越前敦賀の郡教育會にも突然此の書を読み上げた事があります、御承知の通り、先帝様は暑中寒中の別なく避暑避寒の爲めに御休みになつたことがありませぬ、其の間御苦勞爲すつたことが御歌になつたと云ふことであります、下々の者を吾子の如く思召になつて居りますから、此の御歌が存して在ることと思ひます、であります、から御製の御歌を讀み上げ奉りますと、之が直ちに佛心として其の有難き思召が戴けると申すのであります。

其の第一首は、

重荷ひく車の音を聞ける

照日のあつさ堪へがたき日に

其の後に井上君の説明が斯う書いてあります、家の中に居つてさへ夏は随分あつち、よく人はあつちて晝寝もろく／＼出来ぬなど、こぼしますが、無論これは贅澤です、炎天に晝寝どころか、重荷を載せた車を汗たら／＼で引いて居る人もあります、千代田の城の奥に在した、先帝におかせられては、あつち／＼夏の日、に御塚をこねて御耳に達する荷車の音を聞召されたのでございませう、是れならば、子供さんでも分ると思ひます、から大人さんは分り過ぎますと思ふ、實に恐れ入つたことであります、太儀なごちや、家根の下に斯うして居つても汗が出るのにかん／＼と照る處を山の如くに荷物を車に載せて汗たら／＼と引いて行く、其の車の音が宮殿の奥まで聞ける、嘸暑いことであらうと思召す、之が御同情です、斯う云ふ御心であります、たから、二十七八年、三十七八年の戦役に軍人諸氏が生命を忘れて働いたのであります。

其の第二首は、

こどもの鏡

二九三

たちつゞく市の家居はあつからむ

風の吹き入る窓せまくして

「村里とはちがつて都會では廣々と家屋敷を構へることは出来ませぬよし
廣々と構へたにしても、いろ／＼な理由から戸締を厳しくして窓も思ふ存
分開放つことは出来ぬ、まして裏店に住むで居る人々は、ほんの小風呂敷位
の窓から風を入れて夏を過すところも澤山あります、かゝる裏店に住む
で居る人々にまでも御同情を垂れたまはれた御歌です、斯う賢順君は説い
て居ります、皆さんは廣い家に御住居になつて居るから、さう云ふ御感じは
ありません、まいが、裏店に居る者も、吾子と思召すから斯う云ふ御歌が御製に
なつたのであります。」

其の第三首は、

くろがねの舟もたやすく動かして

つよきは水の力なりけり

「一半の水は見てる間にも蒸發して、影も形もなくなりまますけれども、その一

半の水が、百も千も萬も、またそれ以上數へ切れない程集つて大きな海のや
うになりますと、小山のやうな鐵で造つた舟を平氣に浮べて居ます、水の力
の強さは御話になりませぬ、私共も一人々々では極めて力の弱いものです
が、澤山の人が力を一所にすると大した働きをします、斯う云つてあります、
大日本帝國は御世代々萬世不易、即ち天壤無窮の皇運とありて、天地と共に
窮りなしと云ふことを忘れては相濟まぬと思ひます、只だ／＼其の心地で
名々がやつて行く、夫れが即ち日本人の一致と云ふものであります。一致
團結の力は非常に強いと云ふことを御頼りにせられましたな御歌と思はれ
ます。

其の第四首は、

過をいさめ交して親しむが

まことの友の心なるらむ

「楽しい時や面白い時にばかり仲がよいだけではまだ／＼ほんどうの御友
達とは言はれませぬ、人間は神様でもなく佛様でもない以上だれでも過の

あるもので、時によるとそれを自分で氣づかぬこともあるのです、こんな時にそれは悪いこんなにしたらどうかと親切に諫め合ふのが、ほんどうの御友達といふものです、實に味の深い御歌ではありませんか、斯う云つてあります、夫れで私は茲に想ひ出しましたから申しますが、友達と云へば直に分ります、朋友……友人と云つたりする、私共が専門として研究した天竺の言葉では友達と云ふことを二通りに言ひます、其の一つはミトラ之が英吉利でフレンドと云ふことに當ります、ミトラの意味は慈愛と云ふことであります、今晚是れ丈けの私の慈愛が御集りになつたと云ふことが私の友達が御集りになつたと云ふことになり、慈悲の心……慈善の心、御互に愛し合ふと云ふ心がなければならぬ、夫れが眞の友達であります、又スフリツドと云ふ言葉があります、之は英語ではグウドハートで善き心と云ふことであります、今晚是れ丈けの善き心が集つた私に取つて善き心を持つて下さる御方が御集りになつたと云ふのであります、私の爲めに善き心を持つて下さる、即ち之が友達と云ふことになります。

其の第五首は、

人はたゞまことの道を守らなむ

高き賤しきしなはありとも

「あの人達は身分が高いから、一寸爲ることも上品にあるが、われ／＼は賤しい者であるから、少し位は悪いことをしても別に差支はあるまいなどといふ考を起してはいけません、たとひ大臣大将であらうとも、曲つた心を持つてゐては一日でも此の世の中で名譽を保つことは出来ぬ、奥田舎の貧乏人でも、誠の道を守ればこれが神佛や天子様の御意にかなひます、斯う云つてあります、假令身分に高い低いの違ひがあつても、人と生れた以上は誠の道を守らなければならぬ。」

其の第六首は、

よしあしを人の上には言ひながら

身を顧りみる人なかりけり

さう云ふ心得の人は外に出て御出になる御方にはありますまいが、内地に

は随分あります、之は餘程氣を附けねばならぬことと思ひます。井上君は「口の悪い友達」が二人でも三人でも寄るとすぐ誰々は善いが誰々は悪いと人のことを彼是悪口するが、それならば悪口して居る本人はどうかと見ると決して立派な人とはいはれない、却つて世間から爪弾きされて居る位の人である、自分のことをば棚に上げて人のことばかり咎めだてする人は實によろしくない、此の御歌を讀むた人はよくよく覺らねばならぬと云つて居ります、之は非常に御嘆きの御製であります。

其の第七首は、

やすくしてなし得難きは世の中の
人の人たる行ひにして

「とても出来まいと思つた南極探險もやつて見れば出来ぬことでもない、飛行機が立派になつたら空中を鳥のやうに飛ぶことも出来るに相違ない、然るにそれよりも一層難かきことがある、それは私共が世の中に立つて人の道を守ることで、人から指を指されないだけでも難かしいのに、まして

人から賞められるやうにするのは一層難かしいことです」と云つてあります、易くして爲し難きは人の人たる行であるから堪忍してやつて行けと云ふ御希望であります。

其の第八首は、

こゝろある人のいさめの言の葉は
病なき身の薬なりけり

「私共は病氣にかゝると早速御醫者様に診察して貰つて御薬を頂戴します、これは申すまでもなく一日一刻たりとも病氣を無くして健康な身體になりたいからでせう、それは身體の病氣にかゝつた時のことであるが、たとひ病氣はなくとも心の曲つたものはこれも亦た一種の病氣です、此の病氣は御醫者様よりも親切な親や御友達の諫めで癒ります」と言つてあります、身體に病氣がなくても心に病があります、之を吾々の専門の言葉で煩惱と申します、煩ひ惱むと云ふのであります。

其の第九首は、

こどもの鏡

ともすれば搔濁しけり山水の

すませばすます人の心を

昔から人の心を鏡や水にたとへてある塵一つかゝつてゐない鏡はどんな物でもそのまゝ映します濁らずに止つとしてゐる水でもやはりさうです山水も手を入れぬうちは澄むで鏡のやうであるが一度掻き亂せばもはや影も見ぬ痲癢や腹立ちまぎれになつた時の人の心が恰度それです親を怨んだり兄弟を恨む心などはこんな時に起ることですと云つてあります心の持方一つで入らざることに痲癢を起したり無暗に腹を立てると云ふことは丁度水を掻き廻はしたと同じことでもあります心を奇麗に持てと云ふ御誠めの御言葉です

其の第十首は、

つもりては拂ふ方なくなりぬべし

塵ばかりなる事と思へど

大掃除の時に天井裏などに上つて見ると驚いた塵埃です毎日々々掃いて

居る疊でさへ叩けば驚いた塵埃です毎日々々打拂をかけてゐる障子でも一日か二日はかり休むでござんなさい大變ですよほど注意して拭掃除を毎日缺かさずやらねばなりません一寸した悪いことだと油断して居ると後に取返しがつかぬやうになる私共の今日の仕事は皆これですと云つてある塵も積れば山となる山となつては打壊すに手間が掛る塵の時はフツと吹けば無くなつて仕舞ふ悪いけれども人もやるから乃公もやる此のけれどもいかにかぬと云ふのです何處までもけれども附いて行くからいけません然れども然れども英語のバツト前に反對のことを出して行く行きたいけれども寒いでは面白くない塵計りのことと思へども其の時に止して仕舞へば山とはならぬぞと云ふ御誠です

其の第十一首は、
何事も思ふがまゝにならざるが

かへりて人の身の爲にこそ

此の御製は恐れ入つたことで、先帝陛下の御忍耐が此の御歌に現はれて

居ると思ひます。井上君は誰れでも不自由なことは大嫌ひです、それでも氣隨氣儘に何でも出来ることなつたらどうでせう、うむと御菓子を食べたら腹痛を必ず起す、欲しいと思ふ程御錢が俄かに出来たら働く氣は起らない、何事も思ふままにならぬので却つて仕合せである、思ふままにならぬからといつてやけを起す人と、一生懸命に働く人とある、私共はどちらを學びませうかと云つて居ります、思ふ儘にならぬから一生懸命に働くと思ふ儘になります、横濱に平沼専藏と云ふ人が居りましたが、此の人は御夫婦で非常に苦むで居られました、思ふ儘にならぬからと云ふので一生懸命に働いて今日の様な富豪になつた人であり、何事も思ふ儘にならざるが却つて人の爲めになると云ふことです。

其の第十二首は、

世の中の人におくれを取りぬべし

進まむ時にすまざりせば

初版は進まぬと確かにありましたが、之は第二版で校正が悪かつたのでむ

となつたのでありませう、むでは御製の字を誤つたことになつて甚だ畏れ入つたことであります、心の進まぬ時に進んで行かなければならぬと云ふ御製と思ひます。井上君は夏の日中は誰も暑いでせう、冬の夜半は誰も寒いでせう、誰も暑くて閉口してゐるから自分も晝寝をしやう、誰も寒くて閉口してゐるから自分も炬燵に入らう、こんな調子では立派な人にはなりかねる、これはたまたまぬと人の弱つてゐる時には、こゝが辛抱だと自分は勇氣を鼓して進まねばならぬ、弱り込むでしまへば何時までも人の臂につくばかりと云つて居ります、人の臂に附いては一向詰らぬ人の上に立たなければならぬ、氣の進まぬ時に奮發して進んで行かなければ何時も後れを取ると云ふ御誠です。

其の第十三首は、

おのが身を修むる道はまなばなむ

賤がなりはひ暇なくとも

「學問と云ふものは小學から中學、中學から高等學校、高等學校から大學へと

云ふ調子に進んでゆけばゆくだけ上達するものである、しかし學問がいく
らあつても人間の道を履み行へぬ者もある學問と人間の道とは別になつ
て居るやうにある、たとひ學校にはゆけずとも、また自分の仕事は忙しから
うとも、人間の道だけは一時も忘れぬやう學ばねばならぬと言つてある。
私は忙しいから人間の道を踏まぬと云ふのではいけません、如何に今日の
生活が忙しいと云つても、人間の道を守らずには居られませぬ。

其の第十四首は、

國のためいよくつくせ千萬の

民のこころを一にはして

「よく氣を注げてごらんさい、一家の者が心を合せて一生懸命に勉強する
家は必ず富み榮えてゆきます、はなれ／＼になつて親のいふことを子が聞
かず、子のすることに親が同情しない家は決してうまくゆくものではない、
村にしても、郡にしても、大きく一國についてもまたその通りです、吾々日本
國民は心を一にして國のために盡しませう」と云つてあります、之は何にも

申添へることはない。

其の第十五首は、

賤がすむわらやの様を見てぞ思ふ

雨かせあらし時はいかにと

「東京には藁屋はありませぬ、してみると 先帝が藁屋を御覽なされたのは
大演習の場合などでありませう、千軍萬馬の駆めぐるのを御覽なされてお
る時に、ふと田の中の林のほどりに小ぼけな藁屋のあるのが御眼に止つた
でこそあらう、雨風あらし時はいかにと御案じ下される大御心をしのび参
らせると洵に有り難いことではありませんか」と云つてあります。實に恐
れ入つた御製で彼の様な瓦一枚置いてない小さな家に住んで居るが大風
大雨の時には何うするかと云ふ御思召が此の御製になつたのであります。

其の第十六首は、

いかならむ事に逢ひても撓まぬは

わが敷島のやまとたましひ

「ならぬ堪忍するが堪忍とよく昔から人のいふことであるが、なる堪忍は誰
もする、苦しい時辛い時残念な時腹の立つ時、こゝが堪忍のしどころだと思
つてじつと持ちこたへる。それと共に今がやる時だと思つたら暑い寒
いのといふ位なことはびくともせず十分に勇氣を振つて仕事にかゝる、
これが大和魂の大和魂たる所以ですと云つてある。

其の第十七首は、

久しくも我が飼ふ駒の老いゆくを
惜むは人にかはらざりけり

「二天萬乗の大君から御覽なさると、此の國の人民ばかりが可愛相に思召さ
れるのではない、荷くも此の國に生きとし生ける犬も猫も亦不憫である
思召めされる、まして、すは一大事といふ場合に、猛將勇卒を乗せて敵陣に突
き進む軍馬の如きに對しては、一層のことです、先帝は久しく自分の飼つ
て居る馬の老いぼれるのを惜しむのは人と變らぬと仰せられると云つて
あります。之に就て想ひ出しましたから申しますが、先刻もすつと拜見し

ませなんだが乃木大將の紀念帖がテーブルの上に在りましたので御寫眞
丈を拜見して來ましたが、もう皆さんは御承知のことと思ひます、三十七、八
年の戦役に彼れ丈け御働きになつて、凱旋後であつたか其の以前でしたか、
兎も角過日麻布の方に御話に參ることがありまして、電車で參りました、乃
木邸の前を通りましたが降りて乃木邸の中に這入ると云ふ暇がなかつた
のであります、遠方の人らしいのが、門の外に心得が書いてあるのを、謹む
で讀んで門の中に這入られたのを見て居つた、すると彼方に煉瓦の廠が眼
に著いた、彼廠だと思つた、乃木さんの住むで居らるゝ處は粗末であつた
が、廠の方は煉瓦で立派に御建てになつた、時に何誰でしたか、閣下は御自分
の御住居の手入をなさらずに、先づ第一に廠を立派に御建てになりました
のは何う云ふ譯ですかと尋ねられた時に、乃木さんの御返答が一言であり
ます、馬は物が言へませぬからなあ、實に簡單です、物は言へぬが義務丈けは
盡す、能く働いて呉れるから、物が言へる人間が同情して世話をして遣らね
ばならぬ、幼少な子供を母親が御育になるのも同じ事です、御乳が欲しい

か、退屈して外に出たいのか、と種々心配せられるが、中らすと雖も遠からずと云ふことになつて来るのであります。

其の第十八首は、

寄りそはむ暇はなくとも文机の上には塵を据ゑずもあらなむ

「學者は朝晩机にもたれて書いたり讀むたりするのが仕事ですが、その他の人はそんなわけにはゆかぬ、軍人は軍人、御百姓は御百姓、御百姓それ／＼毎日急がしい仕事があるものです、や／＼ともすれば机とは縁遠くなりがちで、つい讀み書きする事を怠る、それは止むを得ないとして、せめて机の上には塵のごまらぬやう一日に一度位はもたれかゝりたい」と云つてあります、之は私も能く言ふのであります、自分が三度食事を致します處は兎も角掃除をして奇麗になつた上で坐つて戴かぬと旨くないと云ふことでありますのに、書物を粗末に取扱つたり、机の上を塵だらけにして置くこと云ふことは甚だ相濟まぬことであらうと思ふのであります。

其の第十九首は、

國民のちからの限りつくすこそ我が日の本の固めなりけり

「世の中のことは何でも可い加減にして打つちやるのが一番いけない、やりかゝつて途中で止した仕事は何の役にも立ちませぬ、半熟の果實は御腹を痛める、生兵法は傷のもとであるとも昔の人は云つて居る、やりかゝつたら最後までやる、此の元氣が大切である我が力のあらん限り、またつゞく限り盡すといふことが、日本帝國をしつかりと固めるわけになる」と云つてあります、此處まで御踏出になつて居れば尙更です、今日御婦人方にも申したことであります、今日皆さんの一言一行、一舉手一投足に就て、ちやんと御心が締つて居れば宜い心に思はぬことは口や身體に出ませぬから、如彼云ふ舉動であれば彼の人の心掛は何うだと判断することが出来、すから、一個人たる何の誰の失策でも國威の如何に關係しますから、一個の南條文雄が心得違をして相濟まぬのであります、若し之が七千萬人同じ様に勝手な

事をしたら 陛下はごうして此の國を御保ちになりませうか、吾々は其の心得を須臾も忘れてはならぬと思ふのであります。

其の第二十首は、
あつしども思はざりけり 沸返る

水田に立てる 賤をおもへば

此の御製を井上君は巧く 先帝様の御言葉の様に直して居る。湯の様に沸きかへる水田の中に立つて草を取てゐる百姓の辛さをおもへば、炎天に家の中に居る者はあゝ暑いなどいはいはれないぞ、——先帝の思召の有り難さには何とも御禮の申しやうもありません。東京をはなれて百里千里あらうとも、水田に田の草を取つてゐる百姓の辛さはちやんと 先帝は御承知でございました。恐れ多いことと云つてあります。此の御製ですな。私が初めて拜見したのは、昨年の七月二十九日の朝、東京を立つて箱根の隧道を越した處の停車場、山北と云つて居つたのを今日は駿河となつて居りますが、其處まで切符を買つて乗りました。實は九月十日でなければ東京に歸

らぬぞと言つて出たのであります。處が駿河驛に降りまして、爪先上りに行くくと小山村です。八月一日から小山町となりました。其の村長が迎に來られて、其處に正福寺と云ふ寺があります。其の寺で教育講演會がありました。衆議院議員の清釜太郎と云ふ人が演説をして先きに歸へられました。私は其の後で晝夜御話を泊つて居ると、先帝陛下の御崩御になつたので、他の處は謝絶して翌日東京に引返しましたが、其の行きがけに、新橋の停車場で何新聞でありましたか、求めて讀んで見ますと、斯う云ふ風に書いてあります。日本は暑い時に暑い、と云ひ、寒い時には寒い、と云ふが、他の國にはさう云ふことはない、寒い、と云つた處で暑くなるものでないが、併し日本人は夫れが正直な證據だと書いて、去年も七月頃暑かつた、其處で侍従の方が御前に出ると、日本人の癖だから、御暑う御座います、御上に置かせられましても、嘸御暑く御感じになりませうと御挨拶を申上げた、時に御示しになりましたのが、此の御製であると云ふことであります。夫れから後、九月三十日でした。越前へ歸りました時に、月は違ひますが、三十日

あつたから御追悼の法要を勤めました其の時に多勢の人が集りましたが、田の草を採るのが本職の人計りでありますから此の御歌を讀むで御前達のことを是程までに思召下されて暑くても田の草を採つて呉れるから朕を首めとして衆の者が米の御飯が食へるぞと云ふ御製と申したら爺さんも婆さんも子供まで疊に頭を著けて恐れ入つたのが未だ眼に著くやうであります。皆さんは米を食ふ丈けの相當の代價を拂つて居るぞと云ふ御感じもありませんか知りませぬが湯の様な暑い水田の中に立つて草を採ることは出来ませぬと云つて作つて呉れる者がなかつたら金が幾等有つても飢死をしなければならぬと云ふことになります其の事を思召になつたと思ひます。

其の第二十一首は、

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

我が民草の上はいかにと

『あまり照り過ぎるともしやひでりがするのではないか、あまり天氣が悪す

ぎるともしや大洪水でも出るのではないか、もしもの事があつて人民が難儀をするやうになりはせぬかと、大君の御心は一日たりとも安らかにあらせられぬ、照るにつけても曇るにつけても私共の身の上を御案じ下さる御慈悲をおもへば、忠義を一層勵ますに居られませぬと云つてあります、誠に大御心の程恐れ入つた次第であります。

其の第二十二首は、

國を思ふ道にふたつはなかりけり

戰のには立つも立たぬも

『まゝ世の中には戦争がなければ忠義は出来ぬものと考へてゐる者がある、以ての外の不心得である、國を心から思ふ人は戰場に立たうが立つまいが、仕事の種類で忠義を重くしたり軽くしたりする事はない、戦の無い時は學生は學問に精出し、百姓は鋏に力を入れる、子守はよく子供を守る、これが直ちに忠義となる、國を思ふ道に變りはない』と云つてあります、楠公は泣男を使つて敵を欺いて勝を制したと云ふことがありますが、如何に楠公の兵

でも悉く泣男計りでは仕様がなと思ひます、日本の子供が一番世界中で能く泣く、私も子供が老人になつたのでありますが、(笑聲起る)日本の子供ほど泣聲の高いのは他にない、英吉利の子供も泣きますが泣くものではない、ませぬと、ピンと錠を掛けて去つて仕舞ふから、諦めて子供も泣きを止める、夫れが内地では稍ともすると思ひますが、弱い男の子が強い男の子に苛められて歸つて来るまでは我慢して来るが、宅に入るとワツと泣き出す、さうすると親が飛んで出て何うしたお、可愛相にとやるから尙更泣くと云ふことになり、甚だ國の耻辱と思ひます。(笑聲起る)

其の第二十三首は、

空蟬の世のためすゝむいくさには

神もちからを添へざらめやは

「此の御歌の最初の空蟬といふ字に意味はありませぬ、さて世の人の幸福安寧を進歩させるために、これに邪魔する者どもを打ち平げる戦争は止むを得ないことである、正義のために起した戦争には必ず神佛が力を添へて下

ざるに相違ない、日清戦争でも日露戦争でも、我が日本の軍隊が連戦連勝したが論より證據である、正義の軍には敵はない」と云つてあります。

其の第二十四首は、

天を恨み人をとがむる事もあらじ

わが過をおもひかへさば

「よく人は自分の思ふままにならぬ時に、あゝ神も佛もないのかと失望落膽して、自分から大切な生命を捨てる者もある、自分の爲すべき事を真面目にやつたら、決して神佛に見捨られない、やるべき事をやらすにおいて、それで天を恨むだり他人を恨むだりするのには身勝手なことで、よく自分自身の過をおもひかへして二度と繰返さぬ様に御注意」と云つてあります。

「此の本丈け讀むで仕舞ひましたが、斯う云ふ様に御詠みあらせられた御歌が十萬もあると云ふことであります。歌計りを詠むだ西行や其の他の歌人であつても、一代の中に十萬前後と云ふ様な歌を詠むだ人はあるか知りませぬが、先づ少数と思つて居ります。然るに萬機の政を御聴き上げ

になる間でも如何なる事でも御感じになつたものは悉く御歌となつて居ります誠にも何うも御製を拜見しましても御慈悲の籠らぬものはありませぬ夫れであればこそ古來無い所の國威を萬國に御耀しになりましたので今上陛下に於かせられましても、先帝に仕へし心を以て朕に仕へて呉れよと御仰せになつて居ります。之は如何なる仕事をして御居でになります御方でも、主上を思ふ至誠の心は違ひはありますまいと思ひます。夫れから一つ御話を申し添へて御別れを致すことにしませう。印度には種々御伽噺の起原と云ふ様な御話が澤山あります、其の中の二つ程御話をしやうと思ひます。

印度に命々鳥と云ふ鳥が居つた、之は作り噺でありませうが鳥渡誠めが面白いです、チーワチーワと云ふ鳥です、支那の言葉に翻譯しますと、チーワと云ふ梵語は生命であります、鳥の鳴き聲を其の鳥の名としてチーワチーワと云ふ、此の鳥はヒマラーヤ山に棲むで居る鳥です、首が二つで胴が一つと云ふ鳥である、共命鳥とも申します、二つの首には耳鼻、口眼とも揃つて居る、

兩頭一身の鳥である、其處で此二つの首を一つは甲、一つは乙として、腹は一つです、一つの口でさへ生命を繼いで居るのに、二つの首がちやんと調子を揃へてやれば造作はありませんが、甲の首は性質が非常に善いが乙の首は悪いのであります、一日性質の悪い方の首が疲勞したか寝んで居る、性質の善い首が眼を開いて見張りをして居ると大變結構な食物に出遇つた、もどく、心が善いから隣の首は能く寝んで居る、態々起すのも氣の毒じや、食つて仕舞へば納まる處は同じであるから腹さへ満ちれば宜いと思つて、獨りで食つて仕舞つた、腹が大きくなつたから寝んで仕舞つた、處へ意地の悪い一方の首が眼を開いて、オヤ何時の間にか腹が充満になつて居る、可笑いと思つて隣の首を見ると甘い香氣が芬々とやつて來た、こりや怪しからぬ、乃公が寝て居る間に甘いことをしたな、さうして腹を充満にして仕舞つた、忌ましくしい奴だと憤つた、併し乍ら性質の善い方の首は善いことをしたと思つて居るから心配なしに乃公が働いて遣つたればこそ腹が充満になつたのだと安心して寝んで居る、此方はオノレ今仕返しをするぞと、頻り

に毒になる物を採して居ると見附かつたから腹は一つであると云ふことを忘れて喰つて仕舞つたので共倒れをしたと云ふ話であります笑聲起る一つの首でさへ命を繼いで行く況して二つの首が調子を揃へてやれば尙更容易であるのに各々争つたからさう云ふことになつたのであります之を人に譬へて當て嵌めますならばなかく味があります印度では斯う云ふ話が澤山ありますみな誠のことである。

(次に一蛇の頭尾大を争ふと云ふ話ありたれども略す)

以銅爲鏡可以正衣冠
以古爲鏡可以知興替
以人爲鏡可以明得失

(唐太宗)

滿鮮詩程

碩果 南條文雄

大正二年十月十六日夜發東京十七日乘臺南丸發神戶十八日過

門司十九日過朝鮮群島之間入黃海

昨夜玄洋蹴浪過、鮮山今日似奔波、須臾舟脚入黃海、憑弔低回感慨多、

二十日達大連宿別院。

神港有緣乘巨船、頽然三日得安眠、午餐方罷兀山近、初度斯生到大連

隨緣飛錫入禪園、紅葉黃花秋色閑、兀坐客窓先得句、此生初見滿洲山

二十二日到旅順登爾靈山次乃木將軍詩韻。

東來今日試登攀、一路崎嶇行步艱、堪想當年征戰苦、彈丸如雨屍爲山

天風吹面路難攀、憑弔復何辭克艱、乃木將軍尙如在、萬人齊仰爾靈山

又登白玉山弔忠死者。

招忠廟外弔忠魂、一死堪欽報國恩、義烈凜然何物是、千秋如日照乾坤

二十六日次伊藤春畝公絕筆詩韻

日白天青南滿洲、黃花紅葉已深秋、今朝偶見藤公筆、追想當年牽暗愁。
是日遊星浦。

水色山光滿目新、和風暖日氣如春、隕星浦上與如湧、況復藹然談笑親。

二十八日登旅順望臺

起伏連山一望中、蜿蜒雲路欲凌空、當年積屍埋幽谷、霜葉猶疑戰血紅。

二十九日過金州

平原鐵路一條長、頃刻瞥過古戰場、追想當年淚空落、金州城外朗朝陽。

三十日過得利寺

得利寺邊吾武揚、山河知是閱興亡、遼東今日治皇澤、暖日和風鐵路長。

車中作

萬家嶺又許家屯、到處唯看有小村、楊樹影疎行客少、秋風蕭寂古平原。

宿熊岳館

正是滿洲十月天、偶然留錫浴溫泉、南軒況復如春日、忘却人間名利纏。

天長節得二絕句

滿洲平野拜東天、處處人家起瑞煙、熊岳城邊雲水客、欣然獻壽萬斯年。

三日坐湯熊岳城、深秋況復遇連晴、天長佳節欲聳耳、中外齊呼萬歲聲。

十一月二日宿哈爾賓

滿洲半月喜連晴、夢裏疑聞猛虎鳴、三十年前在英日、牛津時有此風聲。

四日宿吉林

滿目風光慰客心、連山曠野豁胸襟、行雲流水身無恙、又自長春到吉林。

七日宿公主嶺

我亦東西南北人、隨緣飛錫已連旬、滿洲臻處同朋在、又上巖堂轉法輪。

八日宿四平街

來宿四平街裏家、曠原風死日將斜、學堂今夜揭三寶、欲說謙慈辨儉奢。

九日過昌圖、話今日一日之五條目、宿開原、講丹辰六箴

落木蕭條秋已深、同胞聚處遠來尋、昌圖午課談今日、夜到開原講六箴。

十日宿鐵嶺

半晴連日氣如春，不識寒威襲客身。鐵路坐馳臻鐵嶺，山光野趣最清鮮。

十二日宿湯崗子清林館。

清林館裏浴溫泉，遮莫窓前風猛烈。釀雪同雲凝不散，幽人夢暖得安眠。

十一月十四日發湯崗子經過南臺海城他山分水到大石橋車中作。

湯崗三日喜連晴，又過南臺經海城。維石巖々路傍發，他山分水盡奇名。

大石橋朝日軒與岐阜縣人會。

大石橋頭又下車，藹然和氣似歸家。異鄉還遇同鄉友，共賞窓前明月華。

同夜作

大石橋邊升學堂，盤龍山上月過望。清談好是永今夕，與此同胞會異鄉。

十五日到營口有懷乃木將軍。

劫後風光易斷腸，將軍空去白雲鄉。十年兩度臻營口，依舊悠悠遼水長。

十六日宿遼陽望首山堡憶關谷大佐。

白塔聳空風色優，遼陽元是古青州。傷心最是首山堡，堪想鄉朋戰歿秋。

十七日宿撫順次梅田謙敬君見似詩韻。

人生遮莫覆還翻，相見耐欣知己言。日白天青龍谷寺，地肥家富水雲村。南風吹面如春晝，遠客忘憂向氣溫。展韻謝君情最厚，隨緣使我脫塵喧。

十八日發撫順經蘇家屯到奉天車中作。

日落西方天色紅，茫茫平野接遙空。蘇家屯外乘車客，恍惚疑身在畫中。

秋老今年寒未來，滿洲臻處易徘徊。三旬鐵路真如織，又向奉天城外回。

二十一日自鷄冠山乘手車到釣魚臺。

連山起伏似奔波，課罷輕車倏忽過。水落前川石空出，釣魚臺上夕陽多。

二十二日浴五龍背溫泉。

四面皆山俗慮蠲，五龍背下湧溫泉。浴餘揮筆償書債，不識窓前起暮煙。

大正二年十月十一月之交巡講滿洲應南滿洲鐵道會社之請也，大

塚君爲東道主人周旋懇篤因賦一絕句以陳感謝之情。

三句跋涉與君俱，看盡居然活畫圖。最是同胞到處在，舌耕令我忘吾愚。

贈井下君君善速記余之講話固無講案而君之速記不遺一語乃有

此作

滿鮮詩程

十有餘回事舌耕、謝君手記太分明、關分不及寫吾語、得慰天涯萬里情

三二四

大正三年三月十五日印刷
大正三年三月二十日發行

(非賣品)

南滿洲鐵道株式會社庶務課

大連市東公園町十七號地

印刷者 酒井邦之輔

大連市東公園町十七號地

印刷所 株式會社 滿洲日日新聞社

349
8

257

終

